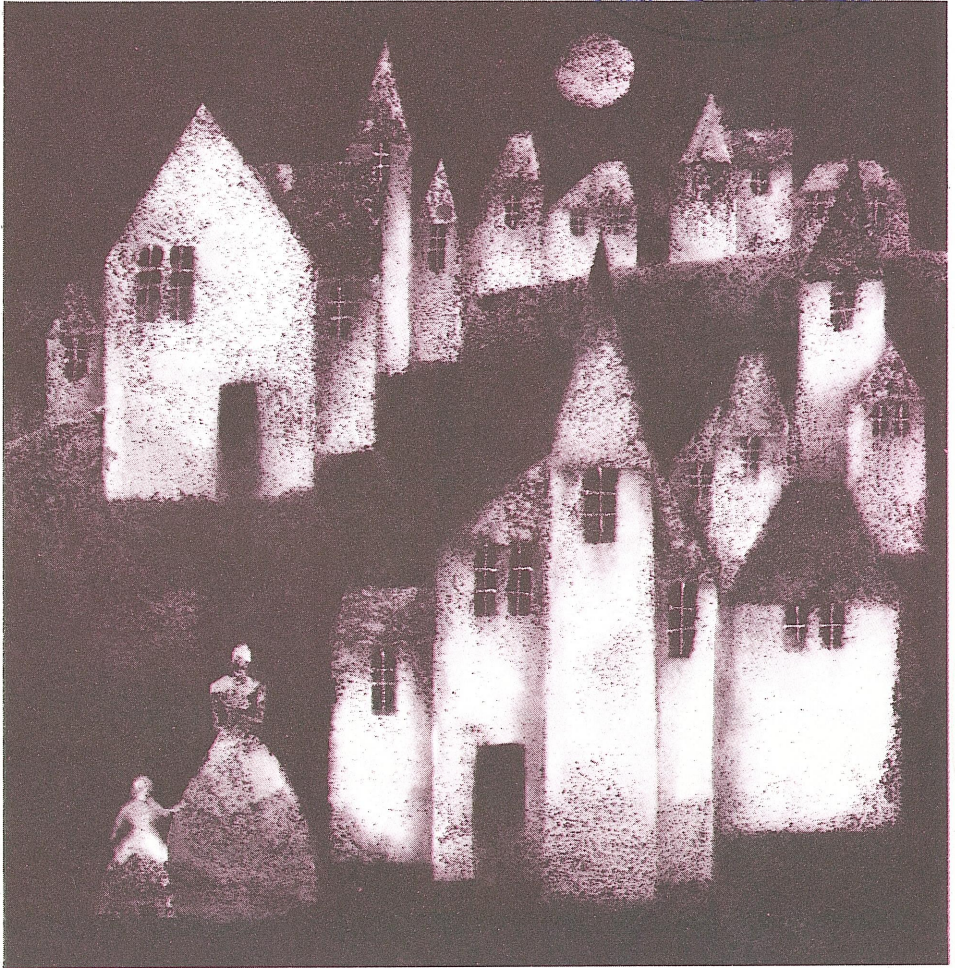
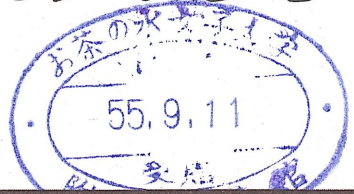


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

9



第七十九卷 第九号 日本幼稚園協会

# 新刊案内

野辺繁子・編／上條滝子・絵  
**すてきな保育者**

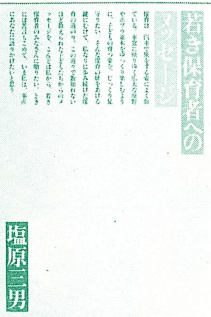
B 5 変型判 64頁 1,200円 千160円

これから保育の仕事に携わろうとする方や保育者になりたての若い人々のための保育入門書。読みやすい文章と美しい絵が、保育の問題を解決していく際のヒントを与えてくれる。

## 若き保育者への メッセージ

B 6 判 200頁 900円 千160円

塩原三男 著



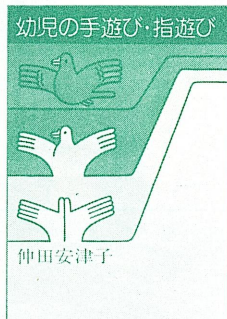
大学で保育者養成に心をくたく著者は、若い保育者が特に苦勞し悩む問題点に長年つきあってきた。これをふまえて、わかりやすい事例をもとに書きおろされたのが本書である。

子ども自身が遊びをつくりだし、みんないっしょに遊べます。

## 幼児の手遊び指遊び

B 6 判 144頁 900円 千160円

仲田安津子 著



指遊び、数遊び、ジャンケン遊び、語りかけ遊び、コチョココチョ、問答遊び、名称遊びの七つをイラスト付で紹介。いずれも体全体を使っての遊びで、二、三歳児から遊べます。

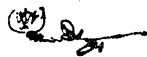
くわしくは、フレーベル館代理店、支社、支店、営業所、特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**

# 幼児の教育

第七十九卷 第九号





幼児の教育 目次

——第七十九卷 九月号——

© 1980  
日本幼稚園協会

表紙 駒宮 録郎  
カッ ト 中島 英子

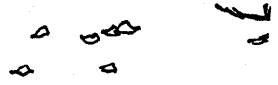
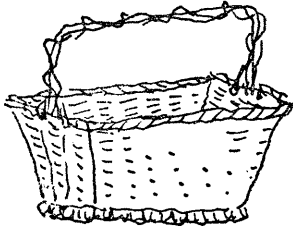
めっちゃ ..... 酒井 恒 (4)

定数と幼児教育について ..... 海 卓子 (7)

幼稚園施設のあゆみ

——東京女子師範学校附属幼稚園のあゆみ—— ..... 菅野 誠 (14)

遊びの発見① いのこづち ..... 有木 昭久 (23)



昆虫の持っている時計……………

松 香 光 夫……………(30)

虫と子ども……………

白鳥美智子……………(34)

子どもの「虫殺し」……………

飛 田 裕 美……………(36)

虫と子ども……………

豊 田 一 秀……………(38)

わたくしのシルクロード……………

④……………

横 張 和 子……………(40)

遊びと子どもの発達……………

⑥……………

加 古 里 子……………(47)

幼児教育者のみなさんへ……………

—— 周郷博先生の最後の講演から ——……………

赤 間 峰 子……………(50)

『復刻・幼児の教育』へ大正・昭和篇のお知らせ……………

(62)

# め っ ち ゃ

## 酒 井 恒

「めっちゃ」という言葉は辞書にも出ていないし、百科事典にも載っていません。それは漁村での方言で、底曳き船が沖に出漁して有用な魚族やエビ・カニなどを漁獲した後の網の残物のことで、海底の泥や砂と一しょにいろいろな海底動物や塵埃が混じっています。

以前にはどこの漁場でもめっちゃも他の漁獲物と一しょに箱につめて持ち帰り、海岸にひろげて乾燥し、田圃や畑の肥料に利用したものです。しかし近頃は化学肥料が普及したので、めっちゃは沖ですてられてしまい、港に持ち帰ることはほとんどなくなりました。

海岸にひろげられためっちゃは海底動物の研究資料を得るのにはこの上ないよい場所です。私も今までに頗る多数の貴重な標本を各地のめっちゃから採集しています。立派な設備をほこる海洋調査船によって得られた結果に劣らない効果が期待できるめっちゃが、今日沖ですて去られてしまうようになったことは海底動物の研究をすすめる上で残念でたまらないように思われます。

嘗て銚子の海岸に乾された犬吠岬沖のめっちゃから拾い出された「ベニスワイガニ」の標本から、日本海の特産と思われていたズワイガニが太平洋岸にも分布していることがわか

りました。紀州南部のめっちゃの中から拾われた世界での超珍種のカニ、「コウガイメナガガザミ」はその時得られた雌と雄の標本以外にはどこからも未だにとれていません。海の動物の探求者にとってはめっちゃはまるで宝物探しの場所のようなものです。

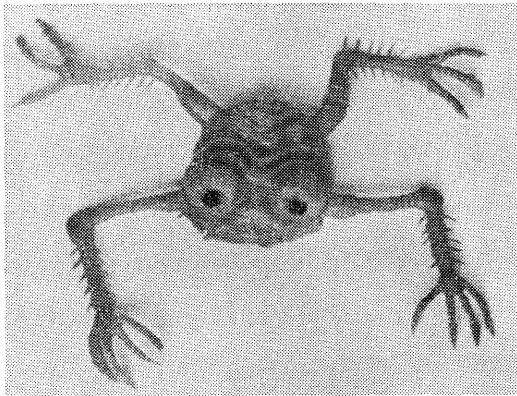
ところが今日でもなお、めっちゃを沖ですてないで大切に持ち帰る所が一ヶ所だけあります。そこは愛知県の三河一色の漁港です。ここでは毎日何十隻という底曳き船が出漁しますが、えものを満載した船は夜明けと共に続々と帰港して、港は一日で最も活気のある朝を迎えます。そして有用な魚やエビ・カニは市場での「せり」にかけられます。めっちゃは船着き場に続くコンクリートのたたきの上に盛り上げられます。そして船主の家族は総出でめっちゃの中から小形のピンク色のモエビをよりわけます。竹の箸を使って見事な手さばきでモエビはかご一ぱいに拾い出されると、鮮度のおちないうちに「せんべい工場」へと送りこまれます。そしてそのエビを材料にして三河一色自慢のえびせんべいがつくられるのです。そのために三河一色ではめっちゃは沖にすてないで大切に持ち帰られるのです。そして「モエビ」の選べつが終ると今度は私たちが貴重な研究資料を採集させてもらう番

になるのです。

めっちゃの中から深い海底の変った動物をえらび出す作業はとても楽しいもので、私は今までに三河一色のめっちゃだけから数十種のカエ・エビの珍種を拾い出しています。また、学術標本以外にも、めっちゃ特有のいろいろな興味深いものが拾い出されます。最も多いのは釣り道具で釣り船から失われたもの、そのほかに遊覧船からの落し物のアクセサリーや玩具など、

時には奇想天外な品物まで現われることもあります。

挿絵にかかげた写真もその一つで相模湾の葉山沖のめっちゃから拾われたものです。柔軟なビニール製品で多分釣りの擬餌



だろうと思いますが玩具にもなるでしょう。何とも面白い作品で、このような珍動物は自然界には実在していません。からだつきから見るとかえるのようで特に二つの目玉と白い歯の生えた大きい口がそう見えますが、背中は丸くて「へいけがに」そっくりです。足は四本で前足には四本の指があり後足には三本の指、指の形はひよこの指そっくりで、それぞれに長い爪が生えています。足の脛すねはむかでそっくりという珍無類の特徴をそなえています。

二人の幼稚園児と二人の小学校低学年に進んでいる私の孫とその友だち、一人一人にこの怪物を見せて感想をききました。所がいろいろな答が返ってきました。

「宇宙人のペット」「りゅうくう城のごきぶり」「どらえもんのカメレオン」など。いずれもそれらの答は一部の特徴を捕えてはいますが、やはり漫画や玩具の影響をうけているようです。

私はずっと以前にある鯛釣りの名人から、こんな話を伺いました。「鯛という魚はとても好奇心と競争心が強いのでこの習性を利用して餌なしでも鯛を釣ることが出来る。釣針に海藻の数片をつけただけで海底に急に上げ下げしていると美

事な鯛がくいついてくる」という話です。このビニールの製品は振るといかにも生きているようにゆれ動くので擬餌としての効果があるように思われます。そしてこの怪物ならば多分人間同様に魚にも好奇心を抱かせるのにじゅうぶんではないかと思われれます。

最近私の友人が、葉山の沖のめっちゃから拾ったという戦艦大和のプラモデルを背負った「サメハダヘイケガニ」の標本を見せてもらいました。ヘイケガニの種類はすべて後方の二対の脚が縮小していて、この小さい脚で、貝殻でも木片でもウニの殻でも身のまわりにある物は何でも背負って甲らをかかす習性があるのです。このサメハダヘイケガニも多分その本能にもとづいて偶然そはに沈んでいたプラモデルの戦艦大和を背負ったのでしようが、正に海底動物の習性の秘話といった感じがします。もしも海底のヘイケガニのそばにプラモデルの軍艦とプラモデルの籠かご(えびら)とを二つならべておいたら今時のヘイケガニはどちらをえらんで背負うでしょうかという漫画ができそうに思われれます。



# 定数と幼児教育について

海 卓 子

## はじめに

いま、小学校の一年級の定数の四十五名を四十名にするかしないか、という問題でゆれています。

一教員について、幼児何名が妥当か、という問題は、教育の基礎的な条件、即ち、子どもの教育環境、家庭や社会の在り方、施設的环境や設備などと共に、教育内容を左右する大切な条件の一つです。

しかし、純粹に教育上からこれを論じることは少なく、公私立を問わず経営上の問題を含めて検討される場合が多いようです。今回の小中学生の児童定数の場合も、国会の議員の質問に対し、「予算の関係上四十名定員は無理」と、答弁されています。

## 一、定数の意味するもの

定数は保育上、どのような意味を持つものでしょうか。

。「金」の心配の方がよい

一九四九年、国立教育研究所付属幼稚園は、「研究所で学校を経営するのは好ましくない」というGHQの指示で、他の国立大学等に移管されるという問題が起きました。在園、修了を含めた百名足らずの父母は、「移管は、移転を意味し、地元のものにとっては、廃園も同じ」として、現状のままの存続を熱望し、移管反対運動が盛り上りました。地元の小学校長をして居られた大石先生は、「海さん、公立幼稚園にしないかね。よければ話してみるけれど」と。たしかに公立幼稚園にすれば、親の負担は少なくなります。しかし、現状の保育内容が維持できるでしょうか？ 私は「先生、現在四歳児二十五名、五歳児三十名ですが、この定員を守ることができるでしょうか？」当時公立幼稚園は一組四十名でした。先生「無理だナ。やっぱりだめか！」ということ、遂に私立幼稚園として再出発することにきめ、一九五一年八月、現在の土地に私立白金幼稚園が誕生したのです。

園舎は、軍の馬小屋を五万円で購入、そのまま移築し、当時、見学の人々に「村役場みたい」と驚かれました。それでも保育内容だけはどうやら維持することができたのです。

。一人三十名で、よくそのような保育がてきますね

一九七五年頃、カナダから、幼稚園を経営しているという女性の大学の先生が一日保育を見学されました。私が、教師は教えこむのではなく、遊びや労働を手がかりに、その可能性をひきだすものである、と説明すると、「一組、何名ですか？」という質問が返ってきました。「原則的に三十名」というと、目を丸くして、「自分のところでは十七、八名を助手と二人で保育をする。この人数でよくそのような保育が出来ますね」と、痛いところを突かれました。いうは易く、行は難し。数年以上の保育歴を持たなければ実際には無理でしょう。

このように定数の問題は、保育内容と切り離しては考えられない重要な問題です。

ここでは、保育者の立場から、保育者一人当りの幼児の人数、又は一園当りの幼児数を取上げて、その意味を考えてみましょう。

## 二、定数を左右する条件

。人数が多い、ということは一。

子どもの後姿を見ても、すれちがった瞬間でも、自然に「○ちゃん」ということばが出てくるようであれば、子どもの心を捉えることはできないでしょう。私はこの数年來、対外的な仕事に追われ、子どものなまえが覚え切れず、つい胸の名札に目がいきます。年長児ともなると、子どもはツト名札を手でかくし、「誰だ？」と、逆に私に呼びかけて先生をテストします。笑い話としてはおもしろいが、これは教育以前の問題で、保育になりません。組を担当していれば、どうやら一五〇名位までは母子のなまえがわかりますが、それ以上はお手上げです。弟妹関係、交渉の多い子ども、又は学年に限られ、路上で会っても、つい形式的な挨拶に止ってしまいます。

欲をいえば、先生の一人一人が全園児のなまえが覚えられてこそ、何時でも、どこでも、居合せた人の適切な助言が可能となるでしょう。子どもの年齢が低ければ低い程、その場で、即刻働きかけないと受止めることが出来ないのです。こう考えますと、一組の定員もさることながら、一園の定員を何名でおさえるか、という問題も出てくるのです。

仮に三歳から保育するとして、三歳児十数名を二人で、四歳児は二十五名二組、五歳児は三十名二組、計五組百二十名余となりましょう。

これを新卒一名、他に数名の保育者で担当するとすれば、最もやりやすい規模といえましょう。

### 。やる気のない子どもたちを抱えて

終戦直後、或は戦前も同様ですが、至るところに焼跡、又は原っぱなどがあり、路地裏でも、道路でも、近隣の子どもたちが、よちよち歩きから、少年に至るまで、屯して遊んでいました。仮に定員三十名としても、子どもたちは既に入園前に、鬼ごっこ、けんかなどの手ほどき位はできていました。ですから、今の子どもたちのようにゼロから一つ一つ教える、という手数は省かれていたのです。三歳児も二学期になれば、「鬼ごっこ」が子どもたちだけで出来、年長組の二学期には、「開戦ドン」(遊軍、守備、援軍というように必要に応じて役を分担し、敵とドンをして勝てば、相手を掴まえることができる。)という集団鬼ごっこが、自然発生的に登場し、三十名が二手に分れて、それぞれ登園する子どもを待ち構えていて自分の仲間に入れる、ルールもおもしろくなる

ように、ジャンケンで負けても「死マナイ役(死ナナイ役、即ちとりこにならない意味)」を作り、次々と発展させていきました。この時代の三十人と、現代の三十人とでは、質が全然ちがって、今の三十人の方がズッと手がかかるのです。

遊ぼうとしない、友だちとの遊び方を知らない、ものの取扱い方がわからない、又、一寸転んでも手をつかず、頭を地面にたたきつけて大事になって医者騒ぎをするなど、教師の眼がたくさん必要となります。

### 。保育者の指導力と定数

保育者の場合は中学や高校の先生とちがって、子どもと一緒に遊んだり、働いたりしながら、子どもを好ましい方向に育てあげていくのです。ですから先生自身も手足が動き、遊ぶことが面白くないと子どもはついてきません。ところが今の先生は、子どもの時から受験勉強に追われて、家事も手伝わず、遊んだことも少いというのです。ここに、先生も子どもも遊べないという状況が生れます。先日も大学で「メデシンボール」を子どもたちがどのようにするか、という話をしたら、「メデシンボールって、何ですか?」ときかれ吃驚しました。大半はこれを知りませんでした。新卒の先生が、

何十人かの子ども一組をまとめて、自然に自分の意図する方向に誘導することができるようになるのには、大体三ヶ年が必要で、更に親の質問に答えて納得させることができるようになるのには、少くも五ヶ年かかるでしょう。ここで初めて専門職といえるのでしよう。しかし実際に若い人々の平均勤務年数は、三ヶ年やっとと、いわれています。数人の先生がいればその半数は指導力が弱い、とみてよいでしょう。ここでも亦、一組の人数が問題となり、原則的に三十名としても、経験年数の少い場合は三十名以下にし、子どもも扱いやすい子どもを多くするような配慮が必要でしよう。又、いつも級単位に保育をせず、経験者と一緒に組を交ぜた保育をしたり、遊び別のコーナーを作って小人数保育ができるような工夫しなければなりません。

### 三、スピード化、能率化、機械化の中で

大正初期に小学校一年生一組の人数は東京で四十人、四十八人位までありました。それでも、先生は休み時間には子どもと遊び、土曜、日曜などは、子どもが先生の自宅に遊びに行き、夕刻に帰るといふこともしばしばでした。担任の女の

先生は赤ちゃんを抱えながら、放課後から六時頃まで受験のための予習をされ、学校の窓から眺めた夕月の美しさが今でも忘れられません。保育所もなく、家事労働は一切手仕事なのに、子守り一人を置くのみで、どうしてこのようなゆたかな生活ができたのでしょうか。ところが今はどうでしょう。

### 。年々人間関係のうすれて――

保育所、幼稚園の普及と家事労働の機械化等により働く女性もふえ、女性の自家用車運転も日常のこととなり、一見、その暮しが向上したかに見えます。しかし手仕事が消え、狭いマンションに閉じこめられた母と子の交わりはうすく、先生と子どもの人間関係も稀薄になり、テストの点数に振りまわされる異常な生活が展開されることになったのです。

小学校で教育実習をした或女子学生が「落ちこぼれの子ども」をめぐっての記述の中で、「実習生だから落ちこぼれの子どもの相手が出来たのであって、一組持っていたら、到底できることではない」として、四年生担当の男の先生の一日の暮し方を記していました。担当の先生は朝七時三十分に出勤、朝礼の前にその日に使うプリントを印刷する。実習生の記録、教案に眼を通しチェックする。八時職員会、八時半か

ら授業開始、十二時三十分から給食指導、昼休み二十分、授業間の十分の休みを含め、その日に返す宿題などの宅習の点検、子どもと遊ぶことなどは全然考えられない。五時限目の授業が終ると、帰りの会十五分。このあとは職員研修、又は職員作業、全校児童のダンス、体育などの分担指導。毎日鬼の目のような赤い眼をして登校、一日中走り回りながら「たまらんですわ」の連発という。

このように子どもの生活と教師の生活が大きく変れば、人間的なふれあいの時間は逆に少なくなって、唯々、点数に氣をとられてウロウロするようになり、児童の数を少しばかり減じても、教科書を何頁かうすくしても、ほんとうのゆとりは生れないのではないのでしょうか。幼児もそのあおりを受けて、ワークブックが横行し、三歳から塾に行き、進学塾通いは四歳児から始まり、週に空いている日は一回のみ、などという笑ってすまされない話も出て来ます。

定数問題の裏には、どうやって歪められた生活を変えるか、という大きな課題が横たわっているのです。子どもと子どもが、子どもと先生が、子どもと母親が、人間的にふれあえる生活の中でこそ、初めて定数が生かされる、ということになり、暮し方の検討まで含めて考えられなければならない

と思います。

#### 四、人間らしい子どもと大人のつきあいの 中で定数を考えよう

。人のいっていること、していることを見たり、きいたりする態度を育てよう

先日も小学校学芸会をみて考えてしまいました。七百八位の子どもたちが、次々に展開される歌や劇を見ていますが、性能のよいマイクから流れ出る挨拶や、せりふが、子どもたちのざわめきに阻まれて時々ききとりにくくなります。とたんに私は自分の小学校時代の式日風景を思い出しました。千人余の全校生徒が時に遠慮勝ちな咳払いがきこえる外は、低い校長先生の話し声の一句一句がききとれたものでした。どうしてこのように騒がしくなったのでしょうか。

集団とか、社会性とか、やかましくいいながら、現実には自分本意に行動してしまう今の教育が、はつきり浮出ているように思いました。

。人と人との信頼感を取りもどそう

或研究会で、子どもの未分化な自己中心的な考え方から発

生するけんかは、大人と異り相手とのぶつかり合いを通さなければ、他人の存在に気付かず、相手の気持を理解することもできない。ですから「けんかはいけないと、きめてかからないで大したけがでない限り、やらせてしまったらよいのではないか、と申しました。若い先生が質問に立って、「お話しはごもっともですが、もし、けがでもさせたら、あとが大変なのでつい、させることができません。部屋にとじこめて、けんかもすぐ止めてしまいますか——」。これも無理からぬことです。この頃のお母さんは「我が子意識」がつよく、けがやけんかをしたりすると、「先生、見ていらっしやったのでしょうか？」と追求します。十年位前までは、同様の場面で「うちの子は腕白で——」「どうぞ、叱って下さい」「あちら様はおけがはなかったのでしょうか？」などという言葉が返ってきました。今は「うちの子はわけなく人様をたたきません」というように、子ども中心の考え方が変わっています。自分は正しいという考えが先に立って、相手への冷い批判が目立つのです。

互に相手を信じ、自分を反省する態度を忘れないようにしたいものです。自分中心的な考え方しか出来ない子どもはよくいに自分勝手になるでしょう。

。子どもの実態をよく掴もう

気のつよい子どもがのさばれば、気の弱い子どもたちは傍にも寄せずさけて通る。或は何をされても文句をいわないの  
で、ますますのさばるといふ悪循環になります。ここで教師  
はその組の子どもでも身辺に起きた事実をリアルに捉えて、  
やたらに「よい」「わるい」をきめようとししないで、誰が、  
いつ、どこで何をしている時に何が起きたのか、その動機、  
原因をたしかめ、どうしたらよいかを考え合うようなたしか  
な、ゆとりある保育をしたいものだと思います。

二月末に年長組の子どもたち七、八名が、階段を利用して  
鬼ごっこをしている。何があったのかT郎(六才一ヶ月)は、  
同組の四人の男の子に囲まれて責め立てられている。とうと  
うT郎は泣き出してしまった。通りがかった私は、「どうした  
の?」と声をかけるとA次(六才一ヶ月)「ダッテ、僕タチ  
遊ビヲ難シクシテヤッテイルノニ、T郎チャン「入レテ」ト  
イウカライレテヤッタラ、マチガエテバカリイルンダモン」  
私「そんなこといつたって、一人の子どもを、四人でよつてた  
かってワイワイいえば誰だつて泣くでしょ」とたしなめる。

T文(六才)は通りかかったY行(六才八ヶ月)を呼び止め、

四人にガヤガヤと文句をいわせる。T文呆然としているが泣  
かない。T文「ホラ、四人デイッタッテ泣カナイダロ、証明  
デキタヨ!」といつて得意になる。私は思わず「証明になん  
てならないわよ。Y行ちゃん何のことかわかる?」Y行「ワ  
カンナイ」といいすて去る。あとで私もおかしくなつて関  
係のない人つかまえるなんて——、というが子どもたちはピ  
ーンとこない様子。子どもにはこんな証明の仕方もあるので  
すね——。

問題は、とかく馬鹿にされ勝たT郎のよさをどうやって子  
どもたちに認めさせるか、A次の思い上つた態度を何を手が  
かりにして反省させるかということだ。このためにはT郎  
A次について、それぞれの長所と短所を先生自身がはっきり  
と掴まなければならぬでしょう。組の先生とも話し合い、  
この子どもたちと遊んで、具体的な今後の指導方向を発見し  
なければなりません。このような保育が出来るような定数と  
いうことを考えてみたいと思います。

(白金幼稚園)

# 幼稚園施設のあゆみ

——東京女子師範学校附属幼稚園の施設とその発展——

菅野 誠

## ○ はじめに

幼稚園施設は、学校施設のモデルとして、常に学校建築の最先端を歩んできた。昔も今も、幼稚園の施設計画には、関係者が智慧をしほり、情熱を傾けて設計してきた。そのような、最も新しい施設であったのかかわらず、また、いっぽうではいつも、原点に立ち返っての反省が加えられてきた。このことが、幼稚園施設の健全な発展を支えてきたことの原因であったように思われる。

お茶の水女子大学附属幼稚園の場合を例として、このような幼

稚園施設計画の発展のあゆみをたどってみることにしよう。

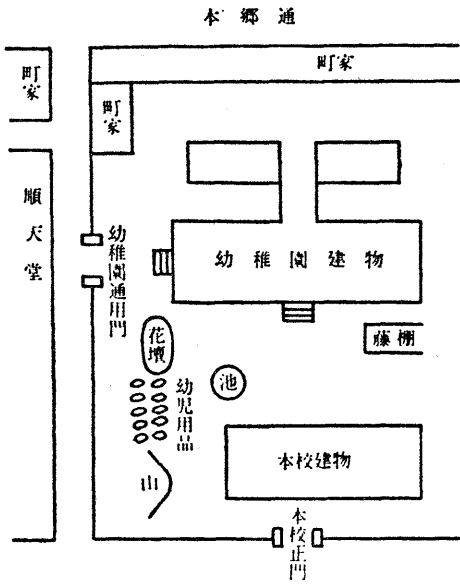
### 一、東京女子師範学校附属幼稚園の施設（明治九年）

我が国、最初の幼稚園は、現在のお茶の水女子大学附属幼稚園の前身、東京女子師範学校附属幼稚園であったことはよく知られている。明治九年十一月竣工した、同幼稚園の建築は、擬洋風建築様式と呼ばれるもので、当時珍しく人々の目に写ったに違いない。この様式は、当然、幼稚園施設の最初のモデルとなつて、その後の師範学校附属幼稚園はもろろんのこと、他の一般公私立幼稚園施設の計画に影響を及ぼしたものであることは、容易に想像



される。

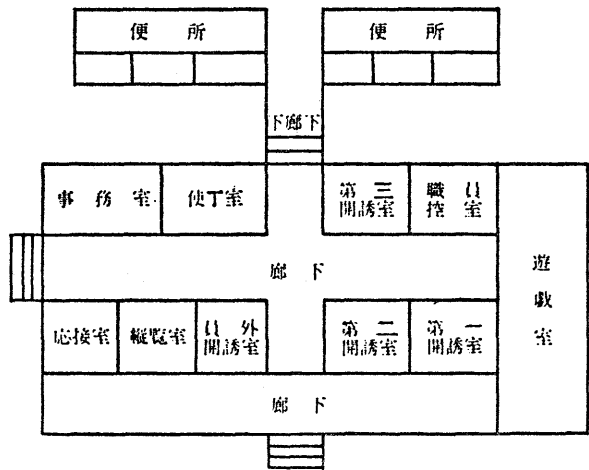
明治九年六月二日に建物の設計などの相談があったことが記録されている。はじめての幼稚園施設のことであったので、当然なこととはいえ、施設を造る技術者側と、施設を利用する教育関係者側、管理者側との話し合いがなされたことは注目すべきことである。幼稚園施設計画にあたって、事前によく話し合いがなされることが、幼稚園施設計画の発展に大いに寄与しているからであ



(a) 建物及び庭園の配置図

る。

その後、直ちに着手して、同年十一月六日に竣工した。位置は現在の東京医科歯科大学の所在する敷地内西北隅で、順天堂病院に隣接したところであった。建築面積は七二三平方メートル（二二五坪）で、建築や樹木の手入れなどに要した費用の合計は五千



(b) 建物の略平面図

▲第1図 東京女子師範学校附属幼稚園の配置図及び略平面図（明治9年建築）

円に達したという。当時としては大金であった。

その平面は第1圖に示すとおりで、主棟はほぼ東西に延びた太い一文字型、背面に便所の棟があった。西の玄関を入れて十文字に廊下を通した中廊下型式で、田の字型プランと称される代表的な擬洋風の平面である。外觀上の様式も、洋風を模したもので、南側には、開放型の廊下を、吹きさらしのペランダ風に加えてあった。床は非常に高く、階段をおりて庭に出るようになっていた。床を高くしたのは、その地下中央に大暖炉を設けたためで、ここから建物全部に鉄管で熱風を送る装置がしてあった。これは、幼稚園のことだから、火災の危険のないように、しかも暖かくという進んだ考えであったが、何分にもそのころの構造、施工はじゅうぶんではなく、思うように採暖することができず、遂にストーブを用いざるをえなかったという。

園舎の主棟には、遊嬉室、開誘室、員外開誘室、縦覧室、応接室、職員室、事務室、小使室兼付添人控室および廊下が配置されており、別棟の便所まで、渡り廊下が設けられていた。遊嬉室は東端の広い室で、現在の遊戯室にあたる。開誘室は、保育室にあたり、机・椅子など、そのころの小学校風に並べ、弁当棚、三角棚などが室の一隅に置いてあったという。員外開誘室は、満三年未満の幼児の保育室で、保育が保育するのではなく、付添人と助

手二名がこの室の保育を担当した特別保育室ともいべきものであった。縦覧室は、資料室兼貴賓室にあたり、これとは別に一般の来客のための応接室が設けてあった。南側のペランダ風の廊下と、中廊下が東端で広い遊嬉室に接していて、完全な対称型は破られていたが、平面・外景とも、ほぼ対称型であった。ペランダの欄干など、細部のデザインも、明らかに擬洋風の特徴を備えたものであった。この建物は明治十七年九月の大暴風雨で屋根が吹き飛ばされ、改築されることとなる。

庭園は広く西に延びて、そこに池や築山、藤棚、花壇などがあった。また、幼児一人あて、おのおの九〇センチメートル(三尺)角に仕切った畝があって、そこに幼児が自ら種子をまいて、野菜や草花を栽培し、自然物の観察を行うことができるようにしてあった。その作業のため、幼児用の小形のくわや手桶、ひしゃくなどが、用意してあった。続いて広い芝生があり、芝生に幼児が嬉々として遊びたわむれるさまは、さながら楽園のようであったという。

## 二、「幼稚園創立法」の施設(明治十一年)

東京女子師範学校附属幼稚園の監事関信三は、幼稚園の創立に

関しての基本的な考えかたをまとめ、『幼稚園創立法』を著わした。これを、明治九年竣工の附属幼稚園施設と対比して読むと興味がある。同施設の解説として読むことができるからである。また、当事の幼稚園施設計画の基本的考えかたを示すものとして重要である。

この「幼稚園創立法」には二種類がある。一つは明治十一年四月、文部大輔田中不二麿に呈進したもので、他の一つは、同年十二月、『文部省教育雑誌』第八十四号に、同じ標題で発表した論文である。この両者の間には若干の差異がある。前者には所要経費などが記されているが、後者にはない。所要諸室は前者のほうが多く、後者はきりつめた、最小限度のものとなっている。かわりに建築的諸注意は、後者のほうが詳しい。収容幼児数は、前者が三六人であるのに対し、後者は四八人である。思うに、東京女子師範学校附属幼稚園の設立に関して苦心したところを、他の師範学校附属幼稚園設置の場合の要望として前者に記し、一般の幼稚園設立の場合の注意としての基準を後者に述べたものである。すなわち、前者は標準的基準を示したものであり、後者は幼稚園設置の最低基準を記したものと考えられる。

この二つの幼稚園創立法の「屋宇ノ結構」と「園庭ノ景況」の二節に、それぞれ園舎と園庭の計画上の諸注意が述べてある。以

下後者の創立法の場合について、その概要を記してみよう。

第一の「屋宇ノ結構」では、幼稚園を創立しようとする場合は、幼児の通園距離を考慮すること、位置は乾燥した土地に選ぶべきこと、園舎は東南に面するがよいことなどを述べ、必要な諸室として、遊嬉室、開誘室、縦覧室の三室を挙げている。遊嬉室は園舎の東端に設け、広い面積をとって、音楽、跳舞、遊戯及び体操に使用するため床板を平らにすること、室の形は南北に長い長方形がよく、北側は保母や幼児用の椅子を置いたり、楽器を備える場所とし、南側は広く開けて遊戯などを行わせるようにし、西側に出入口を設けるがよい。開誘室は二十恩物などで幼児を開誘する場所であるが、幼児は元来性質や年齢が違ふから、これを一室で行なわないで、甲乙二室に区分して、優等開誘場と劣等開誘場とし、その二室の間には板壁又は大きな扉で仕切り、開閉自由とするがよい。床は敷物を敷いて、室の形は東西に長い矩形とし、保母の位置は甲室では東側、乙室では西側に設け、南側の壁には各二個の大きな窓を設けて明るくし、出入口はいずれも保母側に設けるがよい。縦覧室は、各種の玩具、花、籠かごに入った鳥などを陳列したり、幼児に適当な図書、掛図などを掲示して置く室で、その形状は博物館の陳列場のようにするがよい。以上の三室を設けて、なお余力のあるときは保母詰所を設けるが、前記の三

室があれば、幼稚園としてよいと記している。

第二の「園庭ノ景況」では、幼稚園に園庭を附設するのは、飾りではなくて、欠くことのできないものであるとして、フレイベールの園庭観を紹介し、一定の決まりはないが、少しでも広いほうがよいとして、その試案を述べている。すなわち、園庭を公私の二庭に区分し、公庭は園舎の表側にあるのがよく、全体の六〇%以上を充てる。そこには山、谷、田園、池、沼、島などを築造して、その間に竹、木、草花など四季の植物を栽培する。私庭は全体の四〇%以下の地面を充て、園舎の裏側に設け、三・三平方メートル（一坪）若しくはその半分の面積に区画して各幼児に与え、各幼児が随意に草木の種を蒔いて、土をすぎ、水を注いで自ら栽培させる。また、私庭のうち、園舎の東の部分に若干の空地をとって、晴れた日には、幼児全員がここに出て、体操や遊戯をすることができるようにするがよい。なお、園庭の中に井泉や、池沼を設けたり、地域によっては、園外の河水や海潮を引くことができれば最もよいが、幼児に事故がないよう、くれぐれも注意しなければならぬ、としている。

### 三、東京女子師範学校附属幼稚園の

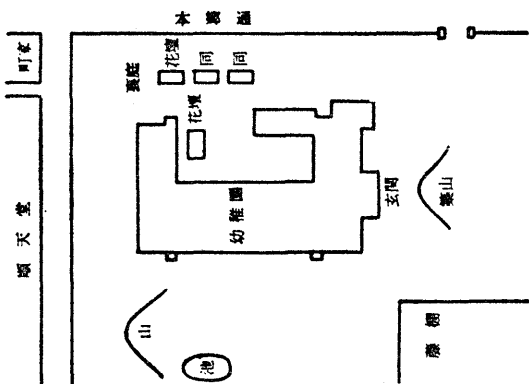
災害復旧（明治十九年）

明治十七年九月、東京地方に大暴風雨が降り、東京女子師範学校附属幼稚園の園舎と園庭は大被害を受けた。屋根は吹き飛ばされ、創立当時の建物は使用に堪えないまでに破損してしまった。やむをえず、幼稚園は本校の食堂を半分に仕切り、しばらくの間、ここに移って保育を行なった。明治十九年三月に、災害復旧の新園舎ができ上がって、四月に移転した。その建物の平面は第2圖に示すとおりで、東側が玄関入口になっていて、玄関より北に職員室、小保育室、小使室があり、便所が別棟となっていた。主棟南側に保育室が四室あり、西棟に遊戯室、参考品室があった。園舎ブロックはコの字型、廊下は内側配置のH字状の片側廊下となっていた。保育室部分が北側片廊下となったことが注目される。

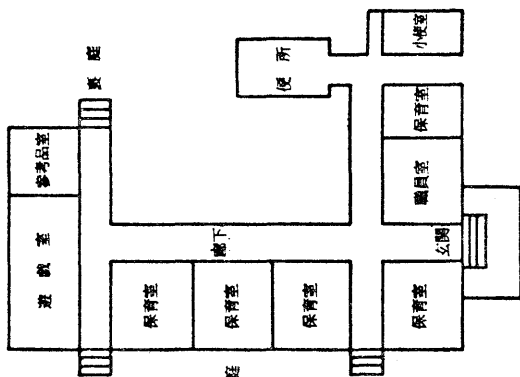
この型式は、中廊下型の擬洋風型すなわち洋風模倣型と、外まわりに廊下を設けた従来の和風型の折衷型式として、昭和戦前期に至るまで推奨された型式に属する。西向きの室を遊戯室と参考品室としたのは、保育室に西日があたるのを避けた結果と思われる。ともあれ、使用上の経験から、擬洋風の欠点と、和風の欠点を改良し、折衷試作型式にまで発展する平面の初期の一例として注目されるものである。

四、岡山県師範学校附属幼稚科の施設  
(明治二十二年)

最初の東京女子師範学校附属幼稚園施設の流れをくむ幼稚園舎の一例として、この場合を調べてみよう。



(a) 幼稚園配置図

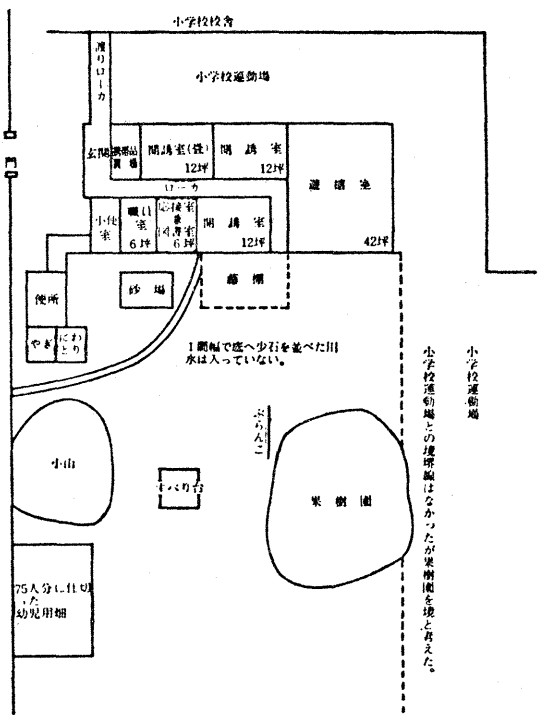


(b) 建物略平面図

▲第2図 明治19年3月再築の東京女子師範学校附属幼稚園の配置図及び略平面図

明治二十二年九月、岡山県師範学校附属幼稚科が、独立の園舎を新築した。その建築面積は三八六平方メートル(二一七坪)で費用は一、二八〇円の西洋式建築、独立園舎であったという。この園舎は大正十一年老朽となって取りこわされてしまっているが、詳細を調べることができないが、関係者の記憶による平面は第3図のとおりであったという。中廊下型で擬洋風の流れの平面であることは明らかである。

東京女子師範学校を明治十二年に卒業した榎本常(のりもと なる)に招いて設立経営に当たらせているので、当然、東京女子師範学校附属幼稚園の設計の影響があったことが想像され、間取りなど、近似している点が多く見られる。このように、東京女子師範学校の卒業生が、全国各地で活躍するようになると、その附属幼稚園のイメージを持って、各地の



▲第3図 岡山県師範学校附属幼稚科の略配置平面図  
 (明治22年9月落成のもので、岡、服部、佐藤三氏の記憶による大正3年頃の様子)

幼稚園の間取りや形態にも影響を及ぼしてゆく。  
 小学校施設に隣接していた関係で、自由な敷地が得られなかったためとも思われるが、南西隅に便所が別棟として建てられている。西側から門を入れて玄関があり、南側に小使室、職員室、応接室と開誘室があり、中廊下をはさんで北側に携帯品置場と開誘

奈良女子高等師範学校が創設されるに及んで、東京女子高等師範学校と名称変更がなされた。そのつど、附属幼稚園に冠する学校名の変更がなされたが、施設は明治十九年の施設をほぼそのまま使用していた。  
 ところが大正十二年九月一日、突如、関東大震災が起こり、こ

室が二つあった。玄関に近いほうの開誘室は畳敷きであったとのことで、東京の女子師範学校附属幼稚園の「員外開誘室」にあたるものと推測される。  
 中廊下の突きあたり、東側に遊戯室がある。東京の場合にみられたペランダ風の南廊下が設けられていないことと、十字型中廊下がZ字型に変わっている相違点がみられるが、その他は東京女子師範学校附属幼稚園の平面をそっくりで、これを模して計画されたものであることは明らかである。  
 五、東京女子高等師範学校附属  
 幼稚園の震災復旧(昭和六年)  
 明治七年創設された東京女子師範学校は明治二十三年女子高等師範学校となり、明治四十一年、

のとき園舎は母校と共に全焼してしまった。復旧についていろいろ議論があったが、現在地の大家窪町に母校もろとも移転復旧することとなった。幼稚園の特殊性から平家建としてであったが、防災の見地から特に鉄筋コンクリート造とすることが認められた。文部大臣官房建築課の設計で、主として西村勝技師の設計によるものであった。

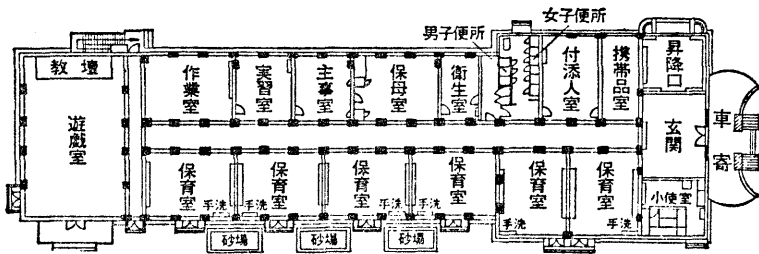
園舎は昭和六年六月着工して、昭和七年十二月に竣工した。そして同年同月下旬本郷湯島から引移り、翌八年一月から保育を始めた。これが現在のお茶の水女子大学附属幼稚園の園舎である。その平面は第4図のとおりで、太い一文字型、中廊下で、ふしぎなことに、明治九年の最初の平面(第1図)と実によく似ている。玄関のところで、西と東をさかさに、ちょうど図面を裏返しにしたもののように見える。東の車寄せを入れて玄関があり、北が昇降口で南が小使室である。中廊下が突き当たりの遊戯室までまっすぐに通っている。南側には六つの保育室がならび、中廊をへだてて北側に携帯品、付添人室、便所、衛生室、保母室、主事室、実習室、作業室がある。南側の砂場、遊園には各保育室から直接に出られるようになっており、よくまとまったプランである。

保育室の出入口上部などには、きれいなステンド・グラスがはめこんである。屋根はフラット・ルーフで、外壁は黄褐色のスク

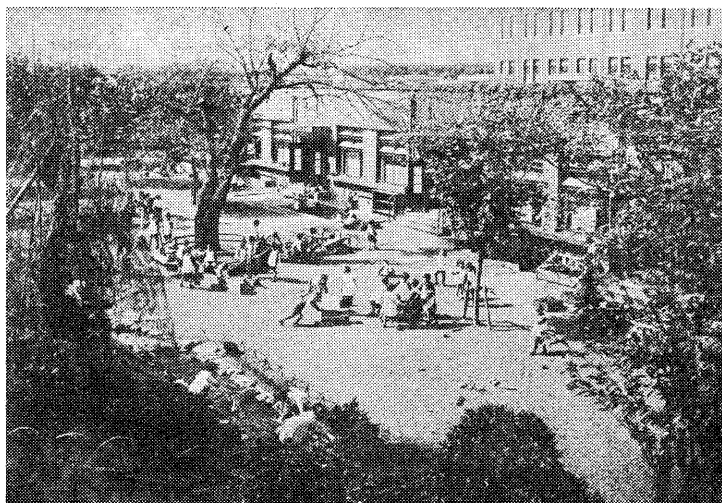
ラッチ・タイル貼り、

保育室外側にはコンクリート舗装部分が広くとつてある。前庭には芝生の遊び場が設けられ、樹木が豊富に植えてある。敷地総面積三、三三五平方メートル(一、〇二一坪)、園舎面積一、二六一平方メートル(三八二坪)、庭面積二、〇七四平方メートル(六二八・五坪)であった。

時代の進歩にともなつて、ディテールについては漸次改良が加えられてはきているものの、構造が木造から鉄筋コンクリート造に変



▲第4図 東京女子高等師範学校附属幼稚園  
(鉄筋コンクリート造) 略平面図 (昭和7年建築)



▲第5図 竣工当時の東京女子高等師範学校附属幼稚園の園舎と園庭

わっても、よく考えられた平面計画は、あまり変化しないこと、また、それぞれの幼稚園には施設についても歴史と伝統があり、たいせつにされてきたことは、注目すべきことと思うのである。

(教育施設研究所)

《参考文献》

- 1 倉橋惣三、新庄よし子、日本幼稚園史、フレールベル館、昭和三十一年四月
- 2 岡山県保育史編集委員会編、岡山県保育史、フレールベル館、昭和三十一年二月
- 3 岡山大学教育学部附属幼稚園、附属幼稚園八〇年のあゆみ、昭和三十一年二月
- 4 東京女子高等師範学校、東京女子高等師範学校六十年史、昭和三十一年一月
- 5 東京女子高等師範学校、東京女子高等師範学校落成記念写真帖、昭和三十一年一月
- 6 全国幼稚園施設協議会編、幼稚園の施設設備の活用5、園舎の歴史と海外の園舎、フレールベル館、昭和四十六年一月
- 7 文部省、幼稚園教育百年史、ひかりのくに株式会社、昭和五十四年八月



遊びの発見 ①

有木 昭久

(あだ名・アリンコ)

いのこづち



A君が「オーイアリンコ、息せききって、あのねーあのねーくっついたんだいっばい」と河原の方から帰ってきた。

「何がくっついたんだい」

「あのねーチクッていたいんだ」

「どれどれ……ここにもついている。あれ背中にもついている。あれここにもあるぞ」

「アリンコこれなーに」

「これはいのこづちという草の実だ。人の身体等について、種が運ばれてそれが途中で落ちて、又そこから芽を出すんだ。どこでついたのかなあ」

「そこ」と指をさす。

「アリンコもこい。いっばいくっつくよ」

「よしみんなもいこう」

子供達と一緒にA君の後ろを追った。

「あれ、もうくっついたぞ」

「ほくもついたよ」

口々に子供達は喜びの声をあげる。洋服やくつ下に実が行儀よく破線を描いてくっついている。まもなく何人かの子供が、茎を折って自分の洋服に、すつと手前に引いて実をつける。すると後ろから他の子がいたすらをして、首の近くにつける。こうなるとチャンバラと同じように、根っこから抜いて互いに、戦いが始まった。年長児三〇人の園外保育の一コマである。

### いのこづちゲーム

次の日「遊び」の時間にふと昨日のことが目に浮かび、庭でいのこづちに関連したゲームをすることになった。まだ題名は決まっていたわけではなかったが、

「昨日は河原でA君が身体いっばいつけていたもの何だか覚えてるかな」

「いのこづち」

「そうだね。今日はいのこづちゲームをやってみようか」

「エー」

子供達は不思議そうな顔をする。こうやって子供と話をしている間に大まかな構想をたて、「くっつく」あそびを展開した。全員バラバラに座らせて、

「アリンコが、いのこづち、いのこづち足」といったら、両手を足にくっつけて下さい。この両手がいのこづち。わかったかな（いのこづちのところで両手をあげて見本を示す）

「いのこづち、いのこづち顔」

「みんな上手にできたね。さあそれでは少しずつ早くするよ」

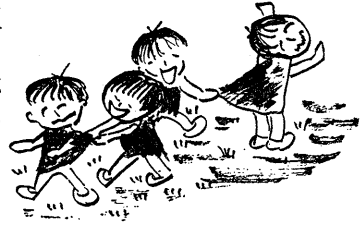
「いのこづち、いのこづち」

「ち、おへそ」

「いのこづち、いのこづち、背中」

この遊びを、「鼻々ゲーム」と同じように展開していった。そのあとみ





くっつけて下さい。いくよ」

「いのこづち、いのこづちお尻」

「キヤーキヤー」

お尻にさわられるのが嫌でにげまわっていて、なかなか思うようにいかない。騒然となる。「いのこづち、いのこづち背中」

子供は相手をみつめて、両手で背中中の洋服をつかむ。だんだん子供達が、つながってきた。「よーし、みんなこんど名前を呼ばれた子供が走ってにげ、他の子はいのこづちになるう。このいのこづちは20数えて、どの子でもいいから、追いかけてくっついちゃおう」

「それでは、光ちゃん、大ちゃん、浩ちゃん、なおちゃん

ん」

名前を呼ばれた四人がにげる。

「1234……20それー」

四人の子供達はそれぞれにげまわるが、いのこづちの数が多いので、やがてつかまって、四つの固まりができてもう動くことができない。

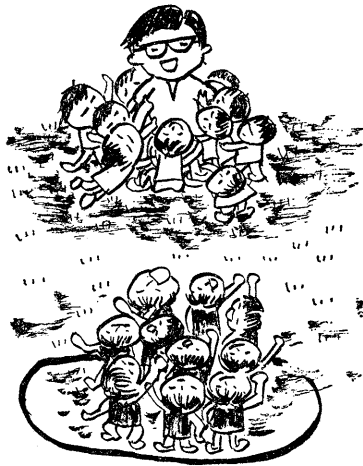
「あつまれー」

次々に子供の名前を呼びながら、遊びが続けられた。



「くっつく」から「はがす」へ

次の日、このいのこづちをとる遊びが次に浮かんた。



「ジャンケンで二つのチームに分かれます。負けた人は、こっちの島(あらかじめ線で書いておく)に入ってください。勝った人は、いのこづちになってアリンコの回りを走ります。途中で、『いのこづち』といったら、いのこづちのチームの人は、アリンコにしっかりとはがれないように、くつついてください。全部いのこづちがついたら、島の人は、『エイエイオー』と元気に飛び出してきて、アリンコにくつついているいのこづちを、はがして島迄つれていってください。いのこづちは、はがされないようにしっかりとつかまっているんだよ。それではヨーイドン」

元気にはがし隊がやってくる。必死になってしがみつく。顔を真赤にしてはがされまいと「わらをつかむ思い」で何でもつかむ。くすぐったり、首ねっこをひっぱる子などが、続出して、

「ずるいぞーくすぐるなー」洋服で首をしめられ泣く子もでてきた。これは大変、そうだがし方の説明を忘れていた。

「タイム、タイム、タイムちよつと待てー」

子ども達は夢中で私のことなんか全然きかない。そこでオーバーに

「いたいたい足がとれちゃうよー」

「いいぞいいぞ、もっとやろうぜ」と、はがし隊のわんぱく坊主。今度は本当に苦しくて、

「いてーいてーちよつと待ってくれ、首が苦しいんだ」

私の悲愴な声でやっとのことでやめてくれた。

「あータイムタイム、あーあーすごいな、フー」

「はがす時の約束がなかったね。ゴメンゴメン」

(ここで一つずつ実演をして、くすぐったり、えり、ずぼんをひっぱったり、けとばしたりひっかいたりするのは反則であることを、皆で確認する)

「さあもう一度やってみよう。いいかな」

「ヨイドン」

いのこづち隊もはがし隊も必死であるが、中には簡単にはがされてしまう子もいる。全員はがされて島につれていられる迄、この遊びは続けられ、そして全員はがされたら、こんどは交替して遊びを行なった。大変勇ましい遊びなので、何度もできないと思っていたが、さにあらず。子供達の中から、「もう一回やろうぜ」という声があり、攻守をかえて、10回程やった。もうくたくたである。

「いのこづち」から「磁石へ」

大変勇ましい遊びなのに、自分が一緒に参加しているので、子どもの状態を見落としていたこともあって、こんどは審判になって、全体の様子を見ることにした。この時子ども達が磁石を持ってきていて遊んでいたの、（これだ！これなら子供同志でくつつくことができる）そしているこづちの遊びを磁石で、展開してみた。

「今日は磁石ゲームをやるよ」

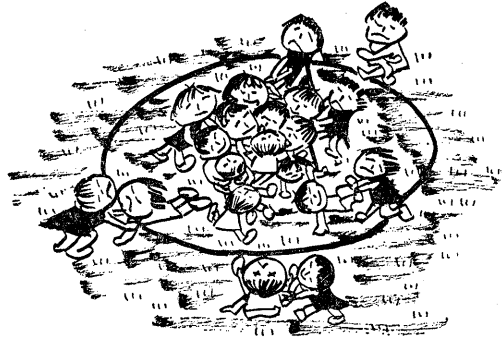
「二チームに分かれて、磁石のチームは円の中、もう一つ

のチームは円の外を走ります。（ルールはいのこづちと同じように一つずつ動作をつけて、見本を見せる）途中で『磁石』といったら円の中の磁石は全員しっかり固まって、はがされないようにして下さい。この時はがしチームはまだ回っています。『はがしてもいいぞ』といったら、はがしチームは磁石をはがして円の外につれていきます。はがされた子は円の外で待ってしっかり応援をしよう」

こうして行なわれた磁石ゲーム。ある時は交替して何度もやったり、時間を二分間に決め、「いくつ」はがしたかというチーム対抗のゲームになったり、最後までがんばった人の胸上げをしたり、拍手を送ったり、「磁石になりたい人」「はがす子になりたい人」を自由に決めさせて行なったりもした。こんなこともありました。いたくて泣くのではなくて、はがされそうになると、「ヤダーヤダー」といって、大声をあげて泣く子、これに対して「おまえずるいぞー泣いたってだめだぞー」又はがそうとするとすぐ泣く。

「アリンコ、この子泣いているよー」と、とまどいの顔でうったえる子供達。

「泣いてもいい、君達ははがしチームなんだからはがすん



## なかよし磁石

何度かやっているうちに、子供達が必死にしがみつき張り続けることに喜びを、感じ始めた。チーム対抗は男  
女別になった。

「今日はね、なかよし磁石といって、一人ぼっちにならないで二人以上なら、何人でもいいからなかよしの友達とくっついて下さい。ルールは先刻承知。さっそく男チームが磁石になり、女チームは、はがし隊になった。時間を決めて交替をする。しっかりとだきあって容易にはがすことはできない。靴がすっぽり抜けたり、シャツがベロンベロンにのびたり、しかし子供達の手はなかなかはがれない。

## 磁石から全体へ

「でも泣いているよ」  
「いいんだ」  
泣けば何でも許される……。泣くという行為で自分を  
防衛しているのだが、ゲームは進行中、子供達はおかま  
いなしにはがした。

合金のロボットが出まわり始める頃になると、子供達  
は、「がったい」といい始めた。ナルホド。何人かがくっ  
つくと大きく強くなるのかよし。

「皆ロボットのロケットになって、空を飛ばそう。そして途

中で合体といたら、くつつくんだよー。さあ小さくなつて用意をしよう。109……3210 出発」

子供達は思いい思いにキーン等と歩いて走り回った。

「がったい!! カキン、コキン、カキン、スポン。うまく合体できたかな。アリンコが宇宙こわし隊になって、みんなをはがしにいからね。アリンコにはがされた子は、あの木の星迄行って帰って、又どこかに合体してください」

次から次へとはがすが、やがて私の方が疲れてきた。子供達が、

「俺手伝ってやるよ」等と喋りだしたが、意地でもやり続けた。

### 竹の子一本へ

「竹の子一本くださいなー」

「まーだ芽が出ないよ」

「竹の子一本くださいなー」

「まーだ芽が出ないよ」

鉄棒や木等に順にしがみついて、抜く遊びが昔から行なわれ、現在でも多くの子供達が喜んでやっている。いのこ



づちからロケットの合体を通して、くつつく、はがす楽しい活動をしてきたが、「竹の子遊び」の会話のやりとりには、遠く及ばない。自分が好きなところに友達と好きなようにくつつく、竹の子遊びに、子供達と一緒にやりながら、できるようになった今日この頃、遊びの素材は、たくさん子どもたちの生活の中にあるということを知ることができた。子ども同志の会話、対話、やりとりと遊びが密接な関係にあって、遊び(ゲーム)が独立してはいない。教える、何のために、どういう目標というのもなく、唯、子供が活動した、もっとやりたい気持が、子どもと一緒に、見つけてつくっていくという力になっているのだからと思っています。(日本児童遊戯研究所)

# 昆虫の持つている時計

松 香 光 夫

九月といえば、真夏の名残りが感じられる時ですが、ある種の虫はもう冬に備えて準備を始めていると言ったら、ビックリする方がいるかも知れません。

ここでは、たまたま私が仕事の材料にしているモモアカアブラムシの例をあげたいと思います。アブラムシ（ゴキブリとは別の虫です）と聞いただけで、じんましんでも出そうな人がいれば、それは残念です。きれいな草花を賞でることは容易ですが、虫たちだって精一杯生きていますので、アフリカの聖者シュバイツァーの言う

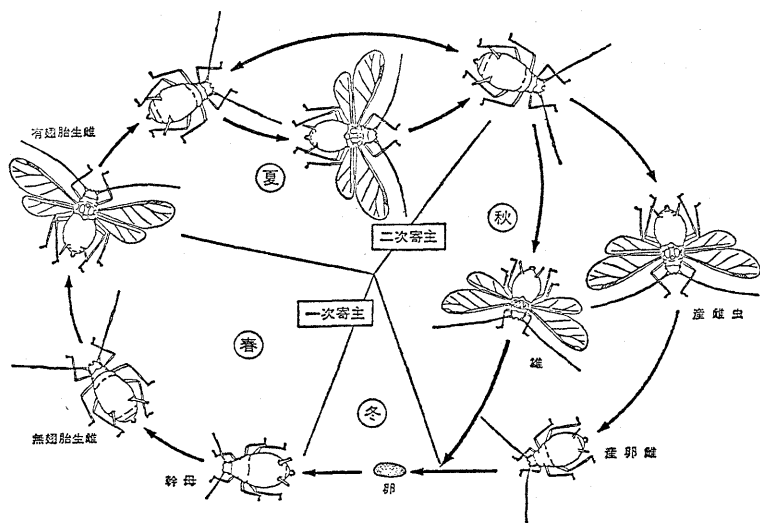
“生命への畏敬”という見方からすれば、何も変るところはありません。

ところで、この虫はモモの木に産みつけられた卵で冬を越し、春にかえった雌は、雄の助けを借りずに子供を産み続けるといふ、常識外れの虫なのです（単為生殖といえます）。おまけに常識外れはもう一つあって、普通の虫が卵を産むのに対し、この虫は胎生といって、体内で発生の進んだ幼虫がうまれて来るのです。これらのアブラムシは翅を持っていませんが、しばらくすると翅のはえた世代が現れて飛び立ちま

す。これはモモの木に仲間が増えすぎて住みづらくなることと、新芽が育って葉が固くなり栄養が悪くなるなどの理由で新天地にゆけるようにという、自然界の見事な適応です。これからの時期は色々な植物（ジャガイモなどの作物を含み、二次寄生植物といえます）の間を飛び移ってその汁を吸うのですが、その際にウィルス病を広めることがあります。さて九月頃になると、それまで見られなかった雄を産むようになります。ほぼ同時に一部の翅のある雌は、モモの木に戻って子供を産みます。この時に生まれる子供は、春から夏にかけてのものとは違って、成虫になった時に雄と交尾して、卵を産む雌であり、これで一年間の生活環が完成します（図を参照して下さい）。

さて九月になったからと言って、どうして雄が現れ、卵を産むようになるのでしょうか？ 答は夜の長さが変わるからです。六月





の夏至から十月の冬至までの間、徐々に日が短くなり、九月には昼と夜の長さの等しい秋分の日がやってきます。アブラムシは夜の長さを測る体内時計を持っていて、この長さの変化をちゃんと知ることができのです。この時計の正体はまだわかりませんが、他の昆虫の例にあてはめると、脳の周辺にある特殊な神経細胞がこれを感じるようです。細胞自体が一定のリズムを持っていることは、ヒトの心臓を構成している筋肉の収縮にも見られることです。アブラムシなどの場合は光が当たるか、暗いかという刺激に反応して、細

胞の活性が変えられるのが、みそです。夜が長くなったことを感じたアブラムシは、やがて冬が来るということを知るのでしよう。体内のホルモン状態を変えてゆきま

す。昆虫には私たちのものとは違うホルモンがいくつか知られており、その一つに幼若ホルモンと呼ばれるものがあります。蝶のような昆虫が卵から幼虫、蛹、成虫と変態するのをご存知でしょう（もつとも、アブラムシには蛹の時期がなく、バッタなどと同様に不完全変態と呼ばれています）。この時には脱皮が起るのですが、脱皮しても幼虫の姿を保つように働くホルモンは幼若ホルモンと名づけられています。しかしこのホルモンは幼虫時代に働くだけでなく、成虫の色々な機能をも支配していることがわかってきました。どうやらアブラムシの場合には、夜が長くなった時にこのホルモンの濃度が下り、そのために体内の卵巣で

最初に起る細胞分裂の仕方が変わって、染色体の数の少ないものができるようです。モアカーアブラムシの染色体数は、雌で十二本あるのに対して雄は十一本しか持っていないことがわかっていますし、また卵の染色体数は、他の生物と同じように親の半分、六本です。結果的には、夜が長くなつた時に、雄が現われ、さらに産卵現象が見られるということになります。

ここで言いたいことは、生物の状態は季節によって変わってゆくわけですが、それぞれの時期に環境の変化を読みとって、自らそれに適応してゆくのだと言うことです。温度も季節によって変わりますが、これは意外な時期に霜がおりたり、秋だというのに暑かったりすることがあって、これを頼りにしているとき々とんでもないことになることがあります。狂い咲き現象は時々見られることです。その点で、日長はそれぞれ一定のペースで変化するのですから、これ

を季節の移り変りを示す信号としてとらえるのは良い方法です。それぞれの地域には、それに合ったやり方で生活する生物が住んでいて、長い時間がかかった進化の結果とはいえ、見事な適応と感心するばかりです。

もちろん、昆虫ばかりにこういった力があるのではないことを、次の例で補っておきましょう。コスモスの花は秋に咲きます。秋に咲く花を短日植物と言いますが、どうしてだかわかりますか？ そうです。夜が長くなった事を感じて、冬に備えて種子を作る準備をするわけです。植物の場合には既に昼と夜とを区別する色素がわかっています。その色素が冬になりそうだということを感じると、花を咲かせるホルモンが形成されるのですが、このホルモンにはフロリゲン（花の素）という名前がついています。その正体はまだわかっていません。花咲爺のみが知るところです。

さて、体内時計と言えば、もう一種類の時計について触れなければなりません。別のアブラムシ（今度はゴキブリのことです）は、夜になると動きまわるのですが、ある時実験室に持ち込んで一日中明るくし、夜のない条件下で観察しても、ほぼ二十四時間毎に活動のリズムが現われます。この周期は個体によって二十三時間であったり、二十五時間であったりすることから約二十四時間のリズムという意味で、サーカディアン（概日）リズムと呼ばれています。このリズムはゴキブリばかりでなく色々な生物に見られます。例えば、インゲンのようなマメ科植物の葉が夜眠る（葉が垂れる）現象は古くから見つかっていた例で、ネムノキという名の由来もこのことにあります。一方、私たちが海外旅行の時に経験する「時差ボケ」も、まさに私たちが自分の体内時計を持っているから起ることです。東京の夜十二時サンフランシスコでは朝七

時ですから、カリフォルニアに着いた第一日、これから一日が始まるうという時に眠くなってしまふわけです。これも数日間です。その地に合ったリズムを獲得し直すことができませんが……。

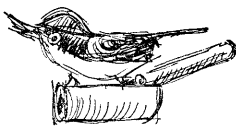
ある昆虫学者が毎朝食卓のジャムに飛んで来るミツバチに気がついて実験を行ったところ、彼等はかなり正確に時刻に対する学習をすることがわかりました。ミツバチは花のみつや花粉を集めるのが仕事ですが、花も一定の時刻に開くことで花時計が作れるように、一日のうち決った時刻にみつを出し、花粉を出します。花と昆虫とは、何億年もかかってお互いに引き合い助け合う生活を作りあげて来たのですが、一日の時間を測る体内時計が、役に立ってきただに違いありません。ミツバチはまた、太陽コンパスを持っていると言われることもあります。太陽は一日のうちほとんど方位を変えないので、このコンパスが役に立つ

ためには、時間を測る時計が必要です。意地の悪い昆虫学者が、時刻を学習したミツバチをジェット機で海を越えて運んだところ、太陽の方向を読み違えて見事に時差ボケを立証した実験もあります。

生物をとりまく環境の一部は太陽の出入り（一日）、潮の干満（二週間）、月の満ち欠け（四週間）、季節の移り変り（一年）などのリズムから構成されています。最近の生物学は細胞や分子のレベルでの理解も進んでいます。そこにも色々なリズム現象が見つかっています。そして生物は、こういった環境要因をつくっているリズムを上手に利用して生活しているのです。私たちの生活を振り返るとどうでしょう？ 私たちはこれらの自然科学的な知識を上手に利用して、自然現象を操り、一年中おいしい果物を求めることができ、きれいな花を楽しんでいます。また夏涼しく、冬暖い生活を作りだして能率をあげています。しか

し、そういった活動は不自然以外の何者でもないのです。最近では、自然の見直しとか、省エネルギー運動が起るべくして起っています。私たちの文明とその成果である文化を捨ててしまうことはないでしょうが、生活と自然のリズミカルな調和に留意すべきでしょう。特に幼児の頃には自然の中に溶け込める場を多くして、周囲で起きている現象を受けとめる力をつけてほしいと思っています。

（玉川大学）



# 虫と子ども

白鳥美智子

ウ虫を乗せてやるんだ。二人は外へ駆け出して行った。

やがて両手一杯に摘んできたクローバーやタンポポの葉をテントウ虫の家に入れながら、「食べるかなあ」と心配そうに覗きこんでいる二人。何を思いついたのか先生、紙ちょうだい。ぼく、いいこと考えたんだ」とKは立ち上ってセロテープとホッチキスを持ってきました。「できた。できた。先生きて。ぼくのスベリ台とMくんのテントウ虫のお家をつなぐんだ。な、Mくん」「うん、Kくん、ここ、テントウ虫の遊園地にしようよ」と顔を見合わせてっこり。それを聞いていたT、「遊園地には観覧車があるんだよ。ぼく、行ったことあるから知ってる。ぼく作る。Kくん、仲間に入れて」「いいよ」と二人。

Tは牛乳パックの箱に紐をつけ、紐を引っばると上がったり下がったりする、観覧車を作ってきました。それにテントウ

「先生、『テントウ虫のお家です。わざわざないでください』って書いて。ほら、ここにテントウ虫のおふろがあるんだよ。それからね、ここは食べる所」といかにも楽しそうに説明してくれるM。今朝、幼稚園に来る途中一匹のテントウ虫を見つけて来たのです。そして、保育室に入るなり箱と紙を取り出していっしょうけんめい作ったのがテントウ虫の家だったのです。

何度も失敗してようやくでき上がったテ

ントウ虫の家には煙突もついていません。誇らしげなM。新居に入ったテントウ虫をじっと目で追いながらひとりごとを言っています。「テントウ虫って何を食べるのかな」「葉っぱだよ。葉っぱが大好きなんだよ」そばでブロックあそびをしていたKがMのひとりごとに応える。「葉っぱの上にはいたら葉っぱかな。そうだ、先生、ぼく葉っぱ取りに行ってくる。Kくん行こう」「うん。先生、この飛行機守ってて。あとでテント

虫を乗せて遊びはじめました。しばらくするうちに近くの子ども達も次々に加わって、いつの間にかテントウ虫の遊園地を覗きこむ大きな輪ができました。やがて昼食の時間になりますと「先生、きょうはぼく達、テントウ虫の所でお弁当を食べるんだ。テントウ虫がひとりできびしいもの」と、テントウ虫をみんなで取り巻いてのにぎやかな食事になりました。

そんな時、Kがそつと近寄ってきて私に耳うちをします。「先生、テントウ虫をお家へ持って帰ろうかな」「困ったわね。だってMくんが見つけてきた大切なテントウ虫でしょう。Mくんに聞いてね。Mくんがいいって言ったらいいわよ」。KはすぐにMの所へ行って話し込みました。思いなしか会話の様子が深刻そうでしたが、うまく話がついたのでしょうか、Kはにこにこしながらもどつてきて「先生、ぼく達決めたんだ。今日はMくんがお家へ持って行くんだ

よ。そして明日はぼくなんだ」。二人でいっしょうけんめい知恵をしぼったあげくの最善策でした。

この最善策は、テントウ虫の失踪によって残念ながら実現しませんでした。「チビ」と名づけられたテントウ虫の搜索隊がその後、連日繰り出されているうちに、子ども達の、虫との出会いも多彩なものになってきました。ハチの巣もその一つです。

今では数少くなつた木の電柱に小さなハチの巣を発見した搜索隊は、「裏庭にハチの巣があります。近づかないで下さい」と幼稚園中知らせ回り、早速図鑑をハチの巣の近くに持ち出してハチの種類や巣の形を調べ始めました。そのうちにだれ言うともなく、ハチのお部屋が小さくて窮屈そうだから、もっと大きなお家を作って、お部屋も広くしてやったら、ということになり、画用紙をたくさん丸く筒にして束ねた大きなハチのお家をガムテープで電柱につけた

り、ハチがせっかく作ったお家に入らないのを見ると、お家が白すぎるのだと言つて色をぬつたり、砂糖水を含ませた綿をハチのお部屋の中に差し込んでなんとかハチを誘い込もうとしたり、それはそれはいへんです。

今の子どもは物がなければ遊べない、物で遊ばせられている、とはよく目にし耳にする現代幼児批判ですが、自然環境が虫にとつて十分に生きられるものであり、子どもにも虫と触れ合う機会さえあれば、虫は子どもにとつては昔も今も変わらないすばらしい遊び相手であることをあらためて発見しました。虫との遊びが子どもの心と生活を豊かに、みずみずしく、そして美しく彩られたものにするための大切な経験になることを願っています。

(福島・わかき幼稚園)

# 子どもの「虫殺し」

飛田裕美

のです。はさみを振りかざして抵抗する虫を、時には逃げられ、時には指を痛めつけられながらも、自分の手の中につかみ込む瞬間、そしてその虫を袋の中に入れ、自由を奪った時に、征服者の快感があるのだと思います。つかまえた虫は、生かすも殺すも、子どもの思いのままなのです。

はさみ虫は、園舎と垣根の間の薄暗く、はじめじめした所にいます。堆肥にするべく積まれた、落葉が腐りかけている土を少し掘ると、ごそごそと逃げようとする小さな虫達の姿が現われます。その中で、黒光りする細長い胴体と、おしりの先にはさみを持ち、つかまえようとすると、そのはさ

みで振りかざして抵抗する手強い虫が、はさみ虫です。色鮮やかな蝶やてんとう虫、ユニークなカタツムリなどの、以前はよく見られた虫が少なくなって来た今日、はさみ虫は虫取りをする子どもにとって、スター的存在のひとつです。朝、ビニール袋を持ってその場所に駆け付け、帰りには、その袋の中に腐葉土と大小様々なはさみ虫をたっぷり持って行く子どもが、毎日絶えま

せん。

子どもは、はさみ虫を可愛がって育てようとか、一緒に遊ぼうなどと考えて取るわけではありません。目的などどうでもいい

ある時、年長男児のRとYは、地面の上に這う小さな虫を見つけました。Rが「なんだらう、これ」と、踏もうとすると、Yは「やめろよ。たたりがあるぞ」と言い、少し離れます。それでもRは、その虫を踏みつぶしてしまいました。

Rにとってその虫は、Rの心に湧き起こった好奇心や探求心、あるいはふとした衝動を満足させるための対象として見えたと思われま

す。これに対してYには、魂のあ

るひとつの生命と感じられたのだと思いま

すが、その魂への畏れは、Rには通じな

ったのです。

子どもを見てみると、「かわいそう」と言っても通じない、Rのような行為はしげしげ見られ、思いがけないその残酷さに驚くことがあります。これは、昔話の『浦島太郎』などのモチーフ（子どもが生き物をいじめ、それを見てかわいそうに思った大人が、代償を払ってその生き物を救う）にも見られることから、子どもと大人の特徴的な姿と考えられます。だから大人としては、Yの態度に共感するのです。しかし、自分の幼年時代を振り返って、Rのように沢山の虫を殺し、そこに快感のようなものを味わってきたことを思い起こす大人は、少なくないと思います。そしていつか虫殺しをやめる時が来ることは、体験から明らかだと思えます。このことから、虫殺しの体験を経て、生命尊重の価値観や道徳を身につけ、残酷な衝動を抑圧するようになって行くという成長の過程が思い浮かびま

す。しかし、この衝動が消えたとは言いません。

さわやかな風が若葉を揺らす五月は、毛虫の季節でもあります。四月には花びら集めて賑わった桜の木の下は、この頃、毛虫退治で再び賑わうのです。始めは恐る／＼毛虫を眺めていた子どもでも、ちょっと足を伸ばして踏んでみたり、棒で突いてみたり……。毛虫を集める子どももいます。次々につかまえた毛虫を、地面に並べて同じ方向に進ませ、ゴールインまで来るのを待ちます。そしてゴールインすると、足でペンヤ。ゴールインしないものも、ペンヤ。結局、辺りはつぶれた毛虫だけになってしまふのです。

害虫の毛虫を退治しながら、いつしか楽しんでる子どもの姿は、やはり残酷に感じられます。しかし、やり方はどうであれ、大人の毛虫退治の結果だっって同じこと

なのです。子どものように、残酷な衝動をストレートに表わさないにしても、大人の心のどこかでは、残酷な衝動を名目の中に合理的に処理しているのではないのでしょうか。その衝動は、成長するにつれて、意識によって抑圧され、忘れられてきてはいるけれども、やはり心の中に存在しているのです。

虫を殺している子どもを見て、その衝動と同じものが自分にも内在していることを思い出す時、子どもと共感できる部分が見つかるといえます。そして、時には、成長と共に忘れていた内なる世界に目を向け、子どもとの共有世界を広げることが必要だな、と思うのです。

(東京・まんとみ幼稚園)

# 虫と子供

豊田一秀

虫をいじめて子は育つ、と言ったら虫たちにおこられるだろうか。

浦島太郎の初めの部分に子供たちがカメをいじめている所を太郎がとめる場面がある。もしも太郎が俺にもやらせると子供と一緒にになってカメをいじめてしまったら、この話は全く成り立たなくなってしまう。一般に社会において弱い者いじめは是認されていらないから、「カメいじめ」をとめ

た太郎は普通の良い大人として描かれている。

一方、カメをいじめていた子供たちも特に問題のある「困った子供」として描かれているわけではない。ごくありふれた子供の遊びの一場面として表わされているのである。

思えばカメ程いじめがいのあるいきものもない。歩みのにぶさ、つつくとすぐに

手足や首をひっこめるくせに、すぐに何事もなかったかのようにまた歩き出すあのずうずうしき、棒で打たれても、ただただ耐えているだけの無抵抗さ、さかさまにした時のあのぶざまなものがき。どれひとつとつてもいじめるに値する。

カメに似ていじめがいのある虫にダンゴ虫がいる。呼び名も他にソウリ虫、丸虫、玉虫、便所虫と様々で、この虫がいかに子供



の身近にいるかを思わせる。私自身のはつきり残っている記憶に、この虫と遊んでいた時のことがある。ボールのようになって身を守るあの保身方法がにくらしくて無理やり開かせたりしているうちに、ついにレスリングの逆エビ固めよろしく逆さまにまゐるめようとして、虫の中身が出て来てしまった時の「しまった!!」「いじめ過ぎた!!」という思いは今も手の感覚としてさえ残っている。

弱い者いじめばかり書いたが、バッタを紙ヒョーキや笹舟に乗せてすっかり自分がそれに乗ったような気持ちになったことや、アリの巢の出口にどつと気前よく砂糖をまいて、サンタクロースってこんなだらうなと思ったりしたこともある。

子供は虫を子分にし、かわいがりそしていじめる。

近年の都会では仲々そうもいかないが、虫は子供の身近な存在である。子供より大

きな虫はいないし、大体は子供の方が勝負して勝つ。しかしハチのようにピリッとすっ返しをする輩もいる。虫は美しい。そしてそれを捕え自分のものにするには、採り方、生態等、かなりのこつ、知識、そして時には勇氣と忍耐が必要である。

忍耐といえば、附属幼稚園の庭にはお山と称して小さな原っぱがある。芝生もなければ花壇もない。そこにはイチョウの大木と古い遊具、他には雑草が伸びるままにはびこっているのみである。子供はそこで草をつみ、虫を採り、寝ころがって空を見る。秋のよく晴れた日、年長の子供が、一メートル程の竹棒を持ってじつと原っぱに立って微動だにしない。何をしているかたずねると、「シーッ!!」としかられてしまう。やがて一匹の赤トンボがその棒の先にとまった。棒がピクッと動くと同トンボはすぐに飛び立つが、ちゃんと戻って来てまたとまる。するとその子は棒をそろそろと手

元に降ろし、そっと手をのぼし、パツとつかまえてしまう。そして私の方を見て分かったかという目を見ると、つかまえたトンボを肩からつるした空箱に入れて、また棒を空につき立てている。その読みの深さ、その忍耐、まるでアリを待つアリ地獄のようにその時彼自身も虫になっていたのかもしれない。

考えてみれば子供と虫はどこか似ている。陽が少し温かくなり、水がぬるむと、とたんに子供の水遊びが多くなり、アリも外に出て来る。それをみつけた子供にせがまれて砂糖を渡すと、アリにやりつつ、自分もベロツとなめたりしている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



わたくしの

シルクロード ④



横張和子

絹の道

シリアのバルミユラは東西の交易路の要衝にあつて、その中継基地として活躍し、オリエント第一の富強な隊商都市として栄えました。その商人貴族の墓から出土した多量の絹織物の大部分は中国から遙々もたらされたものでありました。中国の絹はバルミユラを経てローマに入ったことが考えられます。

地中海の国々の人たちが、絹を知つたのは文献上ではアレクサンドロス大王（紀元前三五六―三三二）の前三三〇年より三三二一年にわたる東方遠征のときにさかのぼります。前三二七年その一武将のネアルコスがアフガニスタンからインダス川の上流、パンジャーブ地方に入ったとき、セリカという国から来たという軽くて柔かな織物を目撃したというのです。彼はこれをインドの産物で樹皮の一種から織つたものといいましたが、現在ではこれは中国の絹織物であつたらうといわれています。

ローマ帝国ではヴェスパシアヌス帝の時代（六九―七九）、大プリニウス（二三―七五）はセレスの絹を「羊毛のような彼らの森の産物」といい、ローマ人のある記録には「ローマ皇帝、執政、將軍の衣服は紫の絹地に金糸で刺繍したもの」であることが述べ

られていて、セレスの絹についての記載は少ないのです。東ローマ帝国の時代になると、ユスティニアヌス二世（五六五—五七八）の時代の歴史家メナンドロスは「ローマ人は絹をほかのどの民族よりもはるかに多く消費する」と述べています。

ローマ帝国が中国の絹を求める最も近い道はイラン高原を横切る陸路であったのですが、ここにはバルティア王国があり、地中海から東進を狙うローマ勢力と対立していました。バルティアは『後漢書』西域伝などに安息として知られています。安息とは王朝の名であるアルサケスからとったものといわれますが、それは前二五〇年ごろ、イラン高原の西北部の遊牧民から興り、イラン高原を占領し、当時、ここを支配していたギリシヤ人を圧倒して王国を建設し、ミトリダチス二世（前一二三—八七）の時にはその勢力は最も拡大し、エウフラテス川の流域にまで及びました。しかし後三世紀のはじめイラン高原の西南部のファルス地方より興ったササン朝ペルシアに滅ぼされますが、その時代はちょうど中国の前漢と後漢の時代に相当します。後漢章帝の章和元年（紀元八七）に、安息は使節を漢の宮廷に送り獅子（ライオン）、符拔（キリンに似た無角の獣）を贈り、また永元十二年（一〇〇）には獅子と条支（シリア）の駝鳥とを獻じていますが、これはバルティアが中国の好感をかって、絹貿易で主導力を独占しようとした

からです。

『三国志』第三十魏略所引の大秦伝によると、「大秦）王が常に直接漢と通交しようとしたが、安息が漢の絹織物の通商を独り占めしようとしてその道をふせぎ、漢に到達することが出来なかつた」とみえています。大秦国とはローマ帝国のエジプトを指し、その首都である利韃はアレクサンドリアであることは確かで、それゆえローマ側はアレクサンドリアを起点とし、海路インドに通商の道を開拓するのです。折しもインド洋に六月から九月の間吹く南東の季節風「ヒッパロスの風」が発見されて、紅海の入口からインドの西南岸まで追風によって順調に航海ができるようになりました。それは一世紀の半ばごろアレクサンドリアで編纂された東方貿易の案内書「エリュトゥラ海案内記」（村川堅太郎訳生活社刊）によく示されています。

それによれば、インダス川の河口にある港バルバリコンからセレスの毛皮や綿布、生糸が、西北部の港バリュガザから絹布がローマ側に輸出されています。そしてその背後の内地にはガンダーラをはじめとさまざまな種族のいることが記されていますが、これによって、セレス（中国）の絹は中央アジアの道を西漸してそこから南下してインドの港にまで運ばれて来て、そこで船に積みかえられて、ローマへと送り出されたことが知られます。



▲ 図 版 ①

東方の絹織物、香料、瑠璃たまりなどに対して、ローマからはローマの銀貨やガラス器などが送られました。このローマとインドの通路は非常に繁昌し、それに伴ってガンダーラやバクトリアには経済的な繁栄がもたらされました。そこにあらわれたのがガンダーラ美術です。

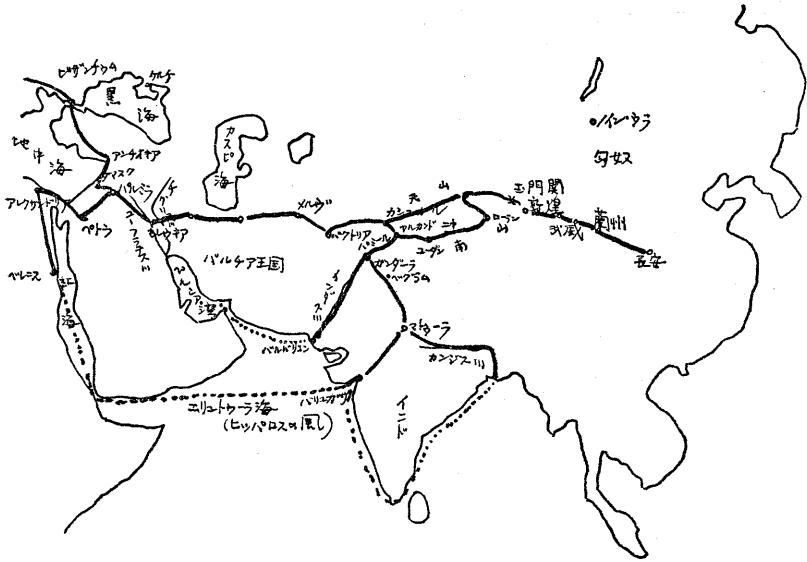
ギリシャ式仏教芸術として知られるこの彫刻芸術には大変濃厚なヘレニズム様式が認められることで有名ですが、それはもはや

ギリシャ的というよりは帝政時代のローマ彫刻に通じたローマの工人の手になるものと考えられています(図版①参照)。かれらは海路インドに来、インダス川を遡行してガンダーラの地に入ったものでしょう。かれらの渡米を招いたのは勿論この地の人々の厚い仏教への帰依がもたらす信仰心であったことは確かですが、決して安くはなかったであろうかれらへの報酬をふんだんに贈えるほどに人々が富裕であったからです。ガンダーラに近いベグラムの遺跡で発掘された彩絵のあるローマングラスは、おそらくアレクサンドリアで製造されたもので海路運ばれてきたものでしょう

▲ 図 版 ②



▼図版③



(図版②)。

パルミユラはこのような東西交易路の繁栄に乘じ、小国であったにもかかわらず、パルチアとローマの間において、その二つの勢力の緩衝地帯として位置を利用して、強大化していったのです。パルミユラに発掘された絹はこの海上ルートを使ってパルミユラに達したことも考えられます。

ここで目を東方に転じ、絹が中国を出て西漸する道をたどってみましよう(図版③参照)。

漢唐の首都、長安(今の西安)から蘭州を経て敦煌までの道は主に南山(祁連)山脈の北麓のオアシスをつないでいる、いわゆる河西回廊の道がとられました。その道の情景はNHK番組の「シルク・ロード」により放映されています。敦煌を出て、玉門関あるいは陽関を過ぎるとタリム盆地の大半を埋めるタクラマカン砂漠が広がっています。その北方に天山山脈が連り、パミール高原にまでまたがっています。天山山脈の南と北にそって二つの道がひらかれ、前者を天山南路、後者を天山北路といっています。またタクラマカン砂漠の南のオアシスを東西に結ぶ道があり、これを西域南道と呼んでいます。この三つの道のことは魚拳の『魏略』にも記され、隋代裴矩の編んだ『西域図記』の序文(『隋書』卷六十七『裴矩伝所引』)に整理されて記述されています。

これらの地域は現在の新疆省ウイグル自治区にふくまれていません。

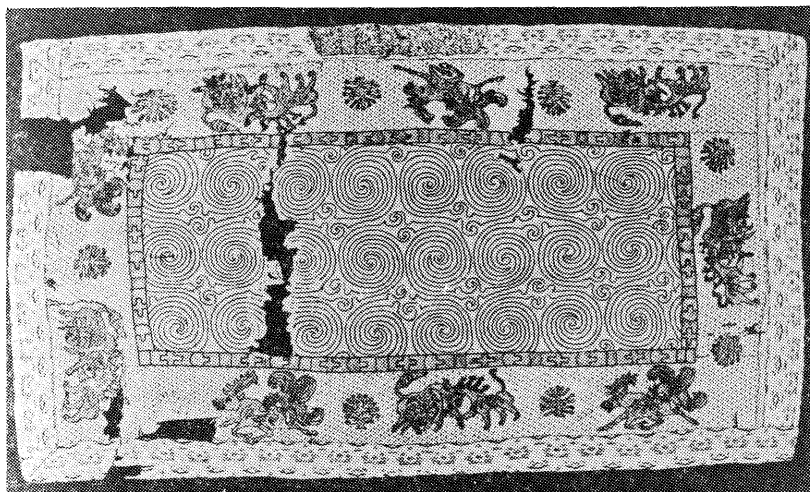
この道は先史時代すでに、「玉の道」としてひらかれていました。新疆のコータンから産出される軟玉が中国にもたらされる道とアフガニスタンのファイサバードで産出されるラピスラズリが西方に運ばれる道とがあり、この道を一貫して通したのが「絹の道」であるのです。絹の道 *Silk Strasse* という言葉をはじめ使ったのは、ドイツの地理学者フリードリッヒ・リヒトホーフェンで、その後、スウェーデンの探検家スウェン・ヘディンやイギリスの探検家オーレル・スタインといった人々や、またわが国の東本願寺の大谷光瑞師をリーダーとした大谷探検隊などによって、これに沿う地域が地理学的にまた考古学的に調査され、文献研究と相まって、その実態が明らかにされてきたのです。スタン卿により極東アジア *Innermost Asia* と呼ばれたそこは、広大なタクラマカン砂漠や険峻なパミール高原を包み込んだ文字通りの内陸アジアであり乾燥アジアです。

長安より敦煌、さらにそれにつづく新疆三道はオアシスに営まれる都市を結ぶもので、その間には砂漠が横たわり、都市はそれぞれ孤立しています。日常の食物はオアシスの緑地を耕作して自給をはかりますが、羊・馬などは遊牧民に求めることになりま

す。また交通の要衝になる大きな都市では商人が住み、地域間の中継貿易を荷い、ラクダの隊商を編成します。この隊商が草原や砂漠を通るときには、そこを支配している遊牧民の了承と保護を要請しなければならず、そのため遊牧民は発言力を強め、月氏、匈奴、鮮卑、柔然、エフタル、突厥、回乾（ウイグル）、蒙古などの北方遊牧民は「絹の道」を常に制圧しようとする、オアシス都市やオアシスの商人たちから、保護の代償として食料や装身具や絹織物を買納させたのです。

匈奴は蒙古高原に根拠をもつ遊牧騎馬民族で、前三世紀の終りごろ冒頓単于（ボクトツゼンウ）が出て、前漢帝国に非常な脅威をあたえたばかりでなく、甘粛回廊地帯にいた遊牧民月氏を西に追いはらい、東胡を従えて、全蒙古を支配下において遊牧民の大帝国を築いたのです。前漢高祖は頻繁なその侵入に苦しみ、宮廷の侍女を公主とならせて、単于に与え、また年々絮（きぬのまわた）、繒（きぬ）、酒、米などを送ったことが『史記』匈奴伝にみえています。

文帝の時（前一七六）、冒頓単于は漢に書状を送り、西は月氏を降し、西域の楼蘭、烏孫、呼揭および近くの二十六国を平定したことを述べ、駱駝一、騎馬二、車を引く四頭の馬二組をもって漢との和親を申し入れてきました。文帝はこれを承諾して、繡袷綺



衣（刺繻の絹布と、綺つまり平地綾が袷仕立てになった衣、パルミユラの墓からも同様のものが出ています）、繻袷長襦（これはよく分りませんが刺繻の絹が使われた袷仕立の長襦袢のことでしょう）、錦の袷と袍（上着）を各々一、比余（くし）、黄金飾具帯一、黄金の胫靴（帯鉤）一、繻十四、錦三十四、赤い締（あつぎぬ）と緑の絹を各々四十四匹を贈っています。

この後、匈奴は漢に馬を、漢は匈奴に帛（絹織物）、糸（絹糸）、絮（まわた）、金、食料などを毎年一定の数量で送り、また辺境の関市で絹と馬を交易するいわゆる『絹馬貿易』が確立しました。匈奴の漢の絹織物に対する要求は相当のもので、中でも最も刺繻を好み、次いで錦を愛好したようです。前漢の賈誼はその著『新書』匈奴編に「家長以上は必ず刺繻のある絹織物をまとい、若いものは必ず文様のある錦をまとう」と書いています。

匈奴は漢の朝廷から多量の絹織物、食料を和平の代償としてうけとり、また関市で、貿易を行いました。他面、騎馬戦術を使って略奪的な行動も少くはなかったのです。略奪した品物はさらに転売することによって、巨利を博し、匈奴をさらに強くしたのですが、この関係は国力が盛んな時には巧くいきますが、国力が衰えると、急速に瓦解します。やがて匈奴は南北の二部にわかれ、後漢の永興元年（一五三）以来、北匈奴は中国の文献にみえ

なくなりません。そこで四世紀に突如ヨーロッパを襲ったフン族は北匈奴の後裔にあたるという説があります。

モンゴル人民共和国の首都ウランバートルの北一三〇キロメートルにあるノイン・ウラ古墳群は北匈奴の王族クラスの墓を含むとされていますが、これが一九二四年ロシアの、P・K・コズロフの手によって発掘調査されました。木槨・木棺ともに漢帝国の古墳と同じ形式であり、容器、土器、木器、装身具など現地あるいは北方産のものほかに、鏡、銅器、漆器、玉、車馬具など明らかに漢の作品であるものが多数含まれていました。漆器の耳杯には「建平五年（前二）五月……」の銘があり、これによって、この墓の年代がほぼ決められています。

織物には毛織物と絹織物があります。絹織物には錦、綺、紗、羅、平絹、刺繍など多様な種類がみられ、すべて漢の作品とみなされます。毛織物では第六号墓の墓室を飾っていたカーペットが注目されます（図版④）。この縁飾りの部分にヤクと有角のライオン、グリフォンとトナカイの闘争図がアプリーケされています。この動物闘争図はペルシアの意匠にもあらわれてきますが、源流はスキタイ系の文化に求められるでしょう。このフェルトの毛氈のまわりに漢の錦が縫いつけられていることにも注目されます。何れも極めて豪華なものです。

漢代の絹織物はシベリアのバイカル湖の南のミヌシンスク近郊のオグラクティの古墳やキルギス共和国のタラス近郊のケンコール古墳、またはるか西方のクリミア半島のケルチのクルガン（高塚古墳）など北方ユーラシアにひろく発見されています。これらはいずれも匈奴によって運ばれたものといわれます。こうしてみると、中国の絹の伝播はひとつ、絹の道を行くばかりでなく、夥しい量の絹を所有した匈奴がユーラシアを騎馬で疾駆することによって果されたといえます。しかしバルミユラ絹の場合は純粹に商業的な行為でもたらされたものであり、平和的手段によったものです。

（山脇女子短期大学）





# 遊びと子ども の 発達 ⑥

(続・歩行跳躍疾走の遊び)

加古里子

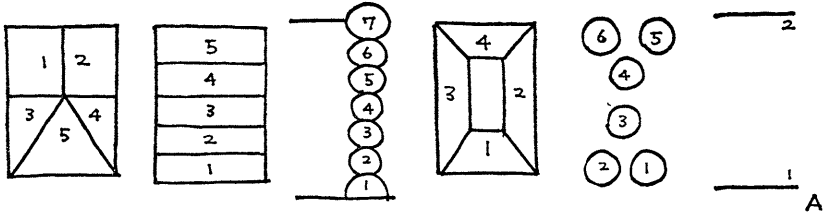
## 片足跳びの遊び (その1)

歩行跳躍疾走の遊びの類に入るものに、片足立ち、片足跳び、交互跳行を主軸とした一群の遊びがある。「石けり」と総称されるものである。

この「石けり遊び」を、その遊び方により大別すると、次のようなA→Dに至る四種にわけることが出来る。<sup>1)</sup>

(その第一 A種)のものは、区画(或いは地点)①から小石を足で

けって、次の区画(或いは地点)②に進め、次々に区画③④……と順次進めて最終区画又は元の地点に帰着するもので、「石けり」の名の起源となる原形的な遊びである。これ等の遊びは、先頭の者から、とぎれる事なく次の者が次々続いて演ずる方法と、先頭の者が一応帰着してから次の者が出發する方法とか、或いは「1 2の3、2の4の5、3 1 2の4の、2の4の5」などという歌詞によって、小石をそのままにして、片石跳躍で区画間をとぶという遊びに転化したものなど、遊び方にはその図形と対応したものが考案されている。

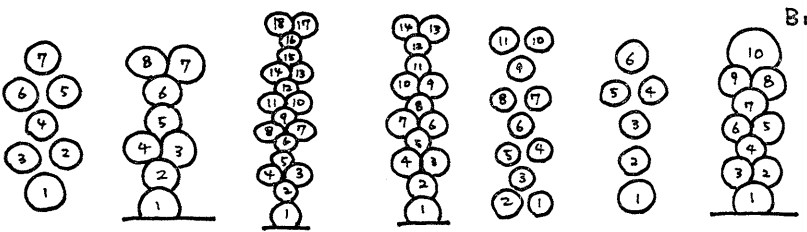


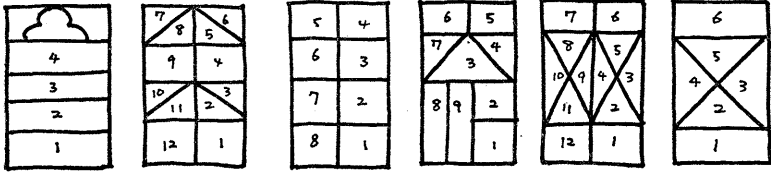
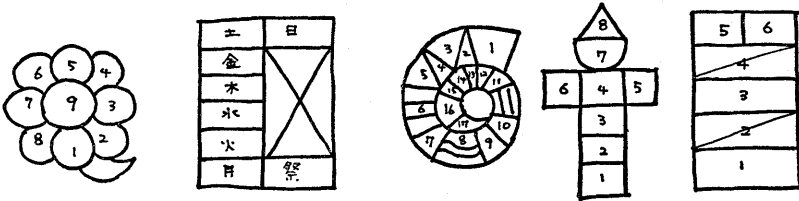
しかしながらこれ等の遊びは、その図形や遊び方が簡単素朴で変化に乏しく、年齢や能力の差に対応する策や適当な休息とか失敗に対する罰則が今一つ面白くない事、更にはこの遊びに於ては区画を明示しておかなければ、成立しないにかかわらず、その区画の線が遊びによって消去しやすくなるという実際上の問題がある為である。遊び方は次第に次の第二B類のものとの混合してゆく傾向を示している。

第二B類の遊びに共通する項目は、小石等の自己の標識を区画①に投じ、他の空いている区画を片足、或いは両足を用いながらも、一区画内には一足との原則を保ちながら、とび進み、

一往復する毎に、区画②、③…と進行してゆく遊びである。その図形的差から区分すると円形をいくつも重積してえがいたもの(B<sub>1</sub>)約50種、長方形を基本型としてその中を縦横斜めに細分化したものの(B<sub>2</sub>)約130種特殊な図形による変化と行為の多様化を楽しむもの(B<sub>3</sub>)約20種が知られている<sup>5)</sup>。

これらの区分の個々の跳び方として、片足両足の接地法を「ケン」と「バ」と称してあらわす為<sup>2)</sup>、「ケンバ」、「ケンケンバ」、「チョンバ」、「けんけん」、「チョン」、「とんとん」、「どんま」、「どっほ」などと称せられているし、その図形から、「丸とび」<sup>3)</sup>、「だんご」、「たすき」、「バツとび」、「たすきがけ」、「大正とび」、「ヤ



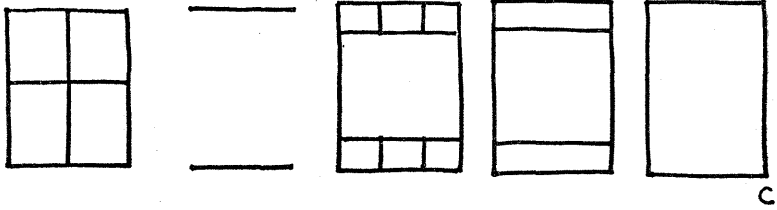
B<sub>2</sub>B<sub>3</sub>

「ッコさん」「でんでんむし」「カレンダー」「電話」「ダイヤル」などと称せられている。

遊び方については、適宜な休憩所を設けたり、「せっちん」とか「こえたご」と称する罰の場所を設けて変化を図る一方、他の者の小石の占める区画変動によっておもわぬ難易度が千変万化する事が、遊びの魅力となつて最も多様なバリエーションを生むに至っている。

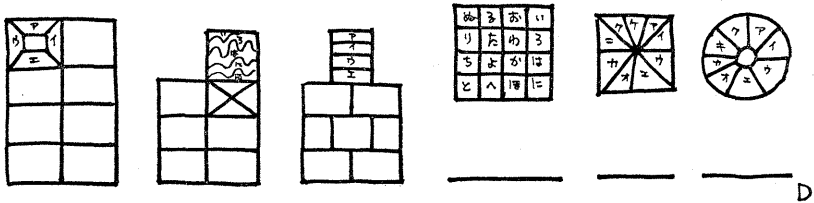
第一のA種から第二のB種に至る間「石けり」の遊びとはいうものの、石を投ずる動作と、片足でとび進む機能に支えられた遊びに変化している事がうかがえるが、更に第三のC種はこの二つの動作を、紅白二軍による対抗として展開するものである。

夫々紅白に分れた二組は、自分の標識としての小石を自陣の線上におく。それに向つて対抗組の各人は、自分の小石を図形内に投じその場所まで所定の歩数でとび、達したなら自分の小石を拾つて、相手陣の小石にあて、当たつたら次のゲームへと進行する遊びである。所定の歩数が一歩から次第にましてゆく為、「一歩二歩」「三歩とび」「五歩とび」「五段とび」「五疊」などと呼ばれるが、前述した、A、B類とちがつて、ここでは小石を「当てる」という動作機能が加わっている為「石あて」「瓦あて」「瓦とび」「瓦とび」などとも呼ばれるに至っている。



遊び方は、単純な跳躍から、小石を片足の甲にのせ、ひざにはさみ、わきの下、あご、肩、ひたい、後頭部、頭頂等、いろいろの所にはさんだりのせたりして、相手陣をねらう変化にとんだくり返しが行なわれる。このことがこの遊びの大きな魅力と特長となっている。異様な体形と、それを維持する努力、そしてその偶然や動作からもたらされる結果が、一喜一憂のたのしさとなって実ってゆく。従って、球形の小石では不適で、平べったいもの、すなわち往時であれば、路傍にどこにでもあった瓦のかけたものが最適であり、前述の「瓦」を名称としている意義がここに明らかとなる。

こうしたC群にあらわれた「投じて当てる」機能を、大きくとりあげた遊びが、D類となる。前述したA或いはBの小石をけつたり、とびながら区画を進んだ後、こまかく分れた区画へ小石を投じ、その小石のとまった名称に従っているいろいろの遊びが展開される事となる。例えば近隣の店屋やポスト、電柱、寺の場所をかいであれば、各自その場所に走って行き、各自の名前をかいたもので、この相手の手を打つ権利を与えられ、数字や金額によってそれが得点となる等のルールト的な遊びに転化してゆくものである。「瓦あて」、「かしや遊び」、「店や」、「字あて」などと呼ばれる。



以上のべたA—Dに至る四種の遊びは、互いにその遊びの機能や図形等において交絡連続していて、それらが類縁関係にある事がわかる。従って「石けり」という名に一見ふさわしくない変形も生むに至っているが、これ等は遊びのもつ独自の变化法則の生み出した結果である事が知られる。そしてこの四種の遊びを貫く基幹となっているものは、片足歩行、片足跳躍、片足直立の諸能力である事がわかる。即ち「石けり」の遊びはそうした片足によって充分平衡を保持し、行動が出来うる為の機能の修得と鍛練並びに習熟に資している遊びである事がわかるのである。(つづく)

#### 参考文献

- 1) 加古里子 「子どもと遊び」 大月書店(昭50)
- 2) 同 「日本の子どもの遊び」 青木書店(昭54)
- 3) 中田幸平 「日本の児童遊戯」 社会思想社 昭45
- 4) 日本体育協会 「あそび百科」 ぎょうせい 昭52
- 5) 加古里子 「石けり遊び考」 未発表記録



# 幼児教育者のみなさんへ

——周郷博先生の最後の講演から——



赤間峰子

周郷先生がなくなられたのは今年の二月二十八日です。そしてこの講演は二月十六日に、今まで何度か先生が講演をなさった。お茶の水幼稚園の遊戯室でなされたものです。私は、この講演を直接に伺えなかった者の一人として、できるだけ多くの方たちにこの「最後の講演」というより先生の「最後の叫び」をお伝えしたいと思って、くり返しくり返し録音を聞きました。そして先生の気魄には、

亡くなられたとはとても思えないような……一方では最後であったからこそ……と両極端の思いをしながら文字にしました。私にとっても、本当に最後の仕事なのだ、といいきかせながら……。

## ◆「春が来た」の世界

この講演はまず一同に「春が来た」を歌ってほしいと先生がいわれて、一同が合唱するところから始まります。そして

先生が中国へいらした時に、今の日本の子どもには見られないような、素直ない顔をした中国の子どもたちが、この歌を歌ってくれたとなつかしそうに話されます。

僕が最初にその歌を歌ってほしいといったのは、日本人が持っていたはずの自然との親しみ深いつながり、そのつながりのおかげで昔の日本人がもっていた感性を、あな

た方の感じる心の中で蘇えらせてほしいと思うから、最初にまず歌ってもらったんです。そして、そのところを抜きにしてしまったんでは、僕の話していることはうろです、ただの理屈です。

このあとに具体的に出てきますが、「感性」という言葉は世界中共通の言葉かもしれないけれども、特に日本には、どの国にもない独特な感性があったはずなのに、戦後三十五年間にこのわれわれの感性がポロポロになったと先生は嘆かれます。そして感性の生きていない人には何をいってもしょうがない、といわれ、重ねて「これわかりますか」と念を押されています。

この講演には実にたくさん、この「わかりますか？」が出てきます。時にはちょっと笑いながら、時にはふりしぼるように……。そのたびに私は、まだ先生は

生きていらっしやる、と思いました。この二月十六日はまだ春とは名のみ寒さでしたが「みんなは春を本当に感じてますか？」とまた念を押されて、ご自分で「興奮してくたびれた」また「若い人は興奮してもくたびれないはずなのに（このごろは）くたびれて？ いやだな」といわれます。

そして、年をとって醜くなる「老醜」ということは、自然にまかせておけばそうなるのがあたりまえで、だからこそ人間は、一生懸命に生きて、老醜にならないように年をとらなければいけない。若いうちから老醜にならないよう、人間の魂の若さをずっともたせていこう、これが教育の基本的なものだといわれます。

そして「今の日本の教育はそれとは反対のことをやっている」と。

昔は実際に「春が来た」の歌のような世界があって、そこにわれわれの心もあ

って、本当に春を感じていた日本人がいたと、実朝の歌、山部赤人の歌などを心をこめて詠じ、先生独特の説明をなされます。次に、

子どもの時までもっていた生き生きとした眼差<sup>まじ</sup>しでね、自分だけでなく、世界のいろんな人たちの悲しみがわかるように、真理というのは何であるかということに、本当に洞察力をもって見る心を、初めはもっていた。それがこわれてしまわないように、老醜におちいるのをさけて、人間らしい若さ、人間らしい知性、人間らしい感情をこわさないように育てておこうというのが、僕は教育だと思えますね。

教育を本気で考える人の心の中に、この線がなかったら、それは教育とはいえないとまでいわれます。

## ◆私は何のために

生きてきたか

つづいてパートランド・ラッセルの自叙伝のまえがき——私は何のために生きてきたか——を読んで下さいます。

『私の人生を支配してきたのは、単純ではあるが、圧倒的に強い三つの情熱である。愛への熱望、知識の探求、それから人類の苦悩を見るにしのびず、そのためにそぞろ無限の同情である。こうした情熱が、ちようど大風のように私をこきかきこと吹きとばした——気のおもむくままに、深い苦悶の大海を越え、絶望の岸へと吹き寄せた……』

最初私は愛を求めた。なぜならばそれは陶酔をもたらすからである——その喜びがあまりに大きいのでしばしば私は、二、三時間、この狂喜のために以後の全人生を犠牲に供しようとしたほどである。

次に愛を求めたのは、愛は寂寥を救ってくれるからである——すなわち、意識もたえだえにおのひいて、世界の果ての冷たい

底知れぬ、いのちなき深淵をのぞく恐しい寂寥である。最後に私が愛を求めたのは、愛の結びつきうちに、その小さな神秘の世界のうちに、聖人や詩人が想像してきたところの、そして自分もつとに胸にえがいたところの天国のヴィジョンを現実に見たからである。これこそが私が求めたところのものである。そしてこれこそが、人生にとってあまりに良すぎるように思われるけれども、とうとう私が発見したところのものなのである。

それと同様の情熱をもって私は知識を探求した。私は人間の心を理解したいと願ってきた。星はなぜ輝くのかを知りたいと望んだ。そして私は、数が流転を支配するというピタゴラス学説の威力を理解すべく努力してきた。そのいくらかを——ほん

の少しではあるけれども、私はなしとげた。

愛と知識は、その可能な限りでは、高く天国に達した。しかしいつも憐憫の情が私を地上に引き戻した。苦悶の叫びが反響して、私の胸にひびくのである。飢えに泣く子どもたち、圧倒者に苦しめられる犠牲者たち、息子から重荷として養われるよるべのなき老人たちや、それから孤独と貧困と苦痛の世界全体か、人生というものがどのようなものであるべきかということ、冷然と愚弄するかのよう、社会の現実として現存しているのである。私はこの社会悪を減らしたいと切望する。しかし私にはできない。そして私もまた苦悶する。これが今日までの私の人生である。

私は、この人生を生きるに値する人生だと思っている。そうして、もしもチャンスが与えられるならば、もう一度喜んでこの人生を生きようと思う。』



これだけの文章を、先生は一気に読まれたわけではなく、そこかしこに感情をこめた独特の解釈をはさんで話されています。愛が陶醉をもたらすのは、人生が辛いからだ、

だって人生は辛いことがあるに決っている。愛でもなければどうして、この辛いような人生の問題に耐えて、そこから逃げたしまったりしないで、その辛い経験から、真珠のように美しい心を、美しい詩をそこから書くなんてことはできないんじゃないか。

この愛というのは、なかなかちょっと説明がつかないですよ。学問するということだって愛ですよ。損得で学問してるのなんて、ろくな学問じゃない。詩を書くんですけど、東山さんが絵を画くのも愛ですよ。

次の、知識について、knowledgeと

いう名詞でいうような死んでいる知識でなく、人間が知りたいと思ひ、その知りたいことを求める働き *knowing* だと説明されます。

三番目の「愛と知識は……」以下を非常に強調され、殊に最後の「もう一度生れてきてもいい」というところは、

実にいいね。九十何歳になってこういう文章が書けるって、立派だなあ。年とってないね。もう一度生れてきてもいいんだ。この人生を愛しているから。というのは人間を愛しているから、地球上に生まれた人間という生きものを愛しているから。

と生き生きと話されています。私にはバートランド・ラッセルの言葉というよりも、周郷先生自身の言葉にきこえます。このあと中座した方があって、先生はとても悲しそうに、その方が先生のお

話に不満だったのだろうと言われますが、実際は気分が悪いために中座されたのことで、このことを先生にお伝えできなかつたのが残念だと思います。

それから先生は、自分が今どういうふうに生きていかうかということをお話されます。ご承知のように、先生は非常に人間を愛された方ですが、その対象の国際的であることに今さらのように驚かされます。たまたまニューヨークの *International Center for the Integrated Studies* (総合化された研究のための国際センター) からの手紙に、現在世界的に問題となっている、人類の滅亡にまでつながるようないろいろなできごとに対して、やはり愛というものについて訴えてきていると、再び話を愛に戻されます。

この状態ね、これを僕もそう感じてきたけれども *ways and power of love* 愛とい

うもののやり方というか、愛というものが  
どういう働きをしているかが、いろんなや  
り方<sup>method</sup>で複数になっています。そして  
愛の力というのはどういうものであるかと  
いうこのことを中心にして、つまり人類全  
体が愛というものをもっとすがすがしい形  
で持ち直そうじゃないかというのが、手紙  
で訴えてきている問題なんです。それ  
は、幼児教育とか大学教育とかと関係ない  
みたいに思われちゃ、困るんですね。愛と  
はなんですか。愛には *love* のやり方と  
いうものがある。愛なんて売りのものにはな  
らない。愛つてものはわからないもので  
す。自分でもわからない。

と、大きな問いをなげかけて下さいま  
す。そして、ある所へ講演にいらした  
時、その園長室に「神は愛なり」とい  
う額がかかっていたけれど、こういう言  
葉を宣伝文句のようにしたり、わかった

ような気になって甘ったれるのは困る  
と、また愛の話がつつきます。

生きていくということは、愛がなければ  
生きてはおれないんです。……(中略)……  
愛があつて、一人の人間は生きてい  
るんです。愛がなければ、いくらいいお医者さん  
でもだめです。薬なんか飲めば飲むほどだ  
めです。愛というのは、不思議な生きる力  
です。自分でそれを感じなければいけません  
。だから生きてるんですよ。誰からも  
らわなくてもいいんです。

それは、植物やなんかでも、みんなそう  
ね、猫でも犬でもそう。猫になって、犬に  
なつて、ちゃんと生きてるだろう。あれは  
祖先からずっと来て、猫の種族を守るよう  
に、たとえ野良猫といえども、一匹の野良  
猫のなかに猫の祖先からきているものがあ  
つて、これを受けて愛によって生まれた生  
命の流れを受けとめて、野良猫が一匹、生

きているわけです。われわれも同じです  
よ。

### ◆「十分の一」と「十分の九」

次に、もうひとつ、バートランド・ラ  
ッセルの著書『人類に未来はあるか』の  
中の「十分の一」と「十分の九」の話を  
されます。これは、人間が遺伝的にうけ  
ついでいるものは十分の一で、あとの十  
分の九は、五千年ぐらい前から人間が畑  
を耕したり、言葉を使ったり、動物を飼  
育したりして歴史が始まり、そのあと、  
水車を作ったり、馬に農耕をさせたりと  
いう歴史的文化的なもの。この十分の一  
と十分の九で、人間というものができ上  
がっているということだと説明されま  
す。そしてこれらの歴史的文化的なもの  
は教育も含めて、十分の一である遺伝的  
なもの(体)に対して働きかけている。

父母からうけついできたものをだめにしてしまうのが、あなたの不幸の始まり、今では体までだめになっちゃってる。ラッセルは、それ(体)を十分の一だといっている。あとの十分の九が変に間違つて、バカに大きくなってきて、十分の一の子どもの体に十分の九を押し込むから、それで人間の子どもの体をだめにしちゃまっている。昔のことっていうわけじゃないよ、体ですよ問題は。教育が、なんていうけれど、体がだめになっちゃったんじゃないですか。人間がもっている、何十年前か前にすでに完成していたこの貴重な財産を、こわしちゃったんじゃないか。頭で覚えなさいなんてことばかりでいいんですか。頭は覚えるようにできているんです。

先生がどんなに子どもの側に立ってやさしく見ておれたかということが伝わってきます。そして同じような考えをもつ

ている「アルベール・トリス」というフランス人の本を訳されて、一九五二年にその人をお訪ねになったと、その彼の本の中から話されます。

僕は戦争に負けた直後に、フランスの年とつた人の、幼児とか赤ん坊をどう育てるかという本を訳しました。その時、一九五二年にパリに行つて、そのアルベール・トリスという人を訪ねたけれども、いいおじいさんでね、僕はバラの花を持って行つた。ストライキで乗り物がなにもないものだから、ずっとセーヌ川を渡つて、アパートの七階かにいる彼を訪ねた。彼の本の中で、いま本当にそのことを気がつかなければならぬところへきたもんだから(こんどはフランス語ですが)「ビアン・フェール Bien faire よく何かがやれるということ(体で)、それがもつたになって、よく考えるという人間になるんですね。『ビアン・フ

エールが土台になって、ビアン・パンセ Bien pensee よく考えることを導き出す』という言葉があるんですね。

子どもは小さい時は、おとなが考えるようには考えてない。なんかこう、やっているのね。季節が来たね、草を摘んだね、花を……ね。体で学んでる、つまりビアン・フェールです。何かができるようになるということが、体の幸せですね。たらふく食つて寝ているというのは、幸せなんかじゃないんだね。体が幸せになる、体が喜びを感じる時がないんですね。寝ちゃつてるんですよ、考えないでね。ビアン・パンセなんてできません。悪い子ばかりだね、多いですよこのごろは、六年生がある日ね、あんなおばあちゃんを殺しちゃうんだから……。体が変わんだ。この変な体に悪知恵だけが吹きこまれてくるんだから、これがどうして、よく考える人間になりますか。ラッセルのいった「十分の一」は、人間の

基じやないか、体は。

ここに、ラッセルの自伝が二冊あるんですが、幼児の時代、おとなが想像する以上子どもは、罪の意識はとても強いものです。僕は悪い子じやないか、と言われる前から感じる子は、強いものです。ラッセルは自分のことでそれをよく言った。子どもは、おとな以上に道徳的なことについて敏感なんです。私は悪い子かもしれないということとは、やりきれないの。これは子どもというもののすばらしい性質ですね。それと抱き合わせのように、ラッセルは、いいます。僕も大学教授をしていたころによく考えていたけれども、小さい子は、人の前で恥をかかされることにきわめてつらく感じるの。「この子に比べて、あなたはなんですか」とか。おとなは面の皮が厚くなっているからがまんするけれども、小さい子どもであればあるほど、比べて、お前は悪い子だといわれることは、人

前で恥をかかされるということは、おとなが想像できないほどつらいことなの。でも、この二つともやらない？ みんなやってるんじゃないの。罪悪を感じませんか。おとなと違うんですよ、子どもは。

このあと、去年の暮から始まった九歳のなのお子ちゃんと先生の、美しい出会いについて話されます。

なのお子ちゃんは小学校三年生ですが、学校へ行っています。何か、学校でこわい目にあってから行けなくなってしまうのです。そしてお母さんたちが話しているのをきいて、周郷先生のところへ連れて行ってほしいといつて、先生のところへ来るようになったのです。「周郷先生のところへ行くと、神様はどこにもいる。周郷先生のところへ行って神様の話を聞きたい」というなのお子ちゃんを、先生も「あんない顔をした子はなかな

かいません」といわれます。

“この僕はずい、九歳の子どもと恋におちたようになりました。この恋はきれいです、この愛は”と……。

そして先生は、なのお子ちゃんの担任の先生（何度もかわって四人目の）と一晩かけて話をなざったり、なのお子ちゃんの家へいらしてなのお子ちゃんと三時間以上話をなざったり、文字にすればそれだけのことも、先生となのお子ちゃんの間には、本当に深い愛による結びつきがあったということが、先生のお話でよくわかります。先生はいつも「子どものくせにか子どもだから、という言葉は間違っている」といわれましたが、本当になお子ちゃんと対等の立場で話し合われたのです。だからこそなのお子ちゃんは先生の中に神様を見たのだと思います。そして

このことも結局、学校の先生とかお母さんがなお子ちゃんの気持ちを考えずにただ強制的に学校へ行かせようとした、大切な十分の一をダメにしていることなのだと話されます。

十分の一をダメにしちゃいけないということ、わかったんでしようか。十分の九が、文化とか歴史とか社会によってつけ加わってきたものなんだな。その元手であるものは二十万年前にでき上がっている。人間になっていく土台ですよ。土台までダメにしちゃっていいんですか。そして文化的、歴史的である教育というものに、私たちの都合で、生れてきた子どもに見さかいかもなく押しつけているのがいまの教育ですよ。

教育はもっと控え目にしてほしい。教育が多ければ多いほどいいなんてことはなですよ。教育は悪の方に回っているんで

すから、大学なんかだってもういらないうすよ。こんないっぱいあって……大学があるのは災いですよ。こんな大学がなければ、もっと人間は考えるようになりますよ。こんなところがあるものだから、入ってきて考えたようなふりしているけれども、なにも考えてない。卒業免状もらうだけじゃない？ あんなものがあるからいけない。

ここからの先生の声は、むしろ悲痛と  
いった方がふさわしいでしょう。それを  
お伝えしたくてそのまま文字にしまし  
た。

### ◆最後に

変な話になってきたけれども、僕が本当に  
におおうと思っっているのは、次の通りで  
す。

アーノルド・ローズさんが手紙に書いて

きた。“mobilization of constructive human characteristics”——歴史的な至上命令としての人間的特質を建設的にどういうふうに作り上げていくか——という提案なんですよ。人間には運命的に持っている建設的な精神、建設的なことをやっていける潜在力があるわけ。これが今、ダメになって、これを八〇年代からあとに向かって、人類全体が、人間のないものをどういうふうに發揮していくかということを提案している。

いままで僕らが教育だと考えていたことは、次の八〇年代の人類のためには役に立たないものです。だから今の常識、常識のわくをこえた教育が必要なんです。それで、ティヤール・ド・シャルダンの『宇宙の讃歌』という本の中から引いた言葉を出してくるんです。これはね、うっかりただ英語で読んじゃうと何のことだかよくわからない。ティヤール・ド・シャルダンの言

葉はそういう言葉です。

Nothing is precious, save (このセイブは—それ以外は—ということですよ) what is yourself in others (他の人々の中にいるあなた自身) and others in yourself. そしてあなた自身の中にいる他の人々、そのほかには何も貴重な、大事なものはないという、この言葉は、ちょっと聞いたばかりでわかりますか？ あなたたち自身の中に在る他の人、そして今度は、他の人の中にいるあなたたち自身……あとの方からいえば、教師、あるいはある人が、僕でいえばなお子ちゃん、が僕をしたって、僕を神様のようについてきてくれる、そして僕を頼ってきた。そのなお子ちゃんの中にいる僕……貴重だよ、これは。これ、僕は大事にせざるを得ない。

それから、他の人々の中にいるあなた自身、あなた自身だけじゃなくて、他の人の中に自分がいるだろうか？ 他の人に影響を

与えているだろう？ お母さんもいるだろう、お父さんも、旦那さんも、恋人もいるね。他の人のなかに自分がある影響を与えているね。他の人が自分によって影響をうけているね。死んじゃったお母さんのなかにも僕がいるわけ、僕から影響をうけて心配もしているかもしれない。

そして、自分自身の中にいる他の人がいます。自分は自分だけで生きておれるわけでもないし、自分がいま自分であるのは、他の人から影響をうけて、ここに自分がいるわけです。こういうつながりをもっている。他の人のなかにいる自分、幼稚園の教師でいえば、子どものなかにいる自分、自分一人子どもとが別個にいるわけじゃないんですよ。子どものなかにいる、なんらかの意味で影響を与えている。子どもの愛と命をもたしている自分がある、あるいは破壊しているかもしれない自分がある。

他の人のなかにいる自分。そして自分も

また他の人から影響をうけている。他の人になんかの意味で助けられたりあるいは邪魔されたりしている。自分のなかにいる他の人々、こういう関係だけが貴重なものです。俺は俺でお前はお前で別々でなんの関係もないというんだったら、これは石よりももっと低級なんでね、その人は人間とはいえない。それが愛というつながりなんだ。これ、わかる？ 僕、話してて息が切れるよ。自分だけ、自分だけでいいんですか。自分だけで生きてこれたんですか。いろんな見も知らない他の人も含めて、一人の人間は、その人間の、あなた自身、人間のなかに他の人がいて、自分をもっているわけです。祖先もずっといました。他の人も僕に影響を与えてくれた、いろんな意味で。それは僕に書を与えてくれた人も、僕にとってはそれをプラスにかえる力があって、感謝すべきことなんだ。そういうふうに、人と人とはつながっているわけでしょう

う。それ以外の、他の人は他の人で、みんな断片的な一人一人別の人で、私は私だというんじゃないくて、人生というのはいこういうつながりになっているのね。それが愛というものですよ。それから世界でもほとんどそうになっているわけです。酸素だけで宇宙が間に合うわけではないんです。いろんな元素があつて、原子があつて、それがつながつて宇宙の現象が起こっているわけです。ところが、人間はいま fragmentation とか、みんなバラバラで自分のことばかり考へてる。

で、このことは、幼児教育を考へた場合、とつても重要だと思わない？ 子どもたちのなかにいる自分は、貴重な問題だと思わなければ。自分勝手に子どもを道具にしてはいけないわけです。自分のなかにいる子どもたちがいるわけです。そして子どもたちのなかにいる自分が、そこにいます。影響を与えているわけです。それ

が、できることならば建設的な方向にその愛のつながりが働いていってほしいというのが、幼児教育の基本的に重要な問題だと思ひます。

くたびれたなあ………愛ということですよ。

そしてさらに、動物は祖先に忠実にその愛を子孫を生むという行為だけであらわしているけれども、人間はそれだけではいけないのだと強調されます。近ごろは結婚してもかえつて顔がおかしくなる女の人もいるけれど、それはやはりこういう愛のかたちがないからで、それがいなら結婚はしない方がいい、愛というものが本当に濁りなくあれば、結婚しなかつてはるかにいいと強調されます。最後にもう一度、くたびれたなあ、これでやめますね、ああくたびれた。どうもありがとう。これでも僕は幼児教育

の話をしていゝるんでね。狭い幼児教育の話をしたんじゃないんだ。幼児教育の問題を、人類の問題として考へていくと、こうなつちゃうんですよ”と結ばれています。私はもう何もつけ加えたり、書いたり、とてもできません。それこそ、私の中の周郷先生を見つめてこれからの人生を生きていこうと思ひます。私にとつても、なお子ちゃんと同じように、周郷先生と神様は一つのような気がするのです。

この講演を文字にするのには、私が実際に伺つていませんので、どうしてもききとりにくい箇所など、毎日新聞社発行『教育の森』五月号掲載の「周郷博士が遺した最後の講演から」を参考にさせて頂きました。また、いつも私の書いたものを通して下さつた周郷先生の代りに、先生のおき理解者山本哲士氏にそれをお願いいたしました。先生と山本先生はまだ知り合はれてから日が浅いのですが、お互いに深い理解をもたれたようので、その意味でも、もつともつといつまでも、先生に生きて頂きたかつたと思ひます。

## 『復刻・幼児の教育』〈大正・昭和篇〉

### 〔趣旨〕

『幼児の教育』誌は、明治三十四年『婦人と子ども』と題されて創刊されて以来、今日に至る迄八十年の長きに亘り、わが国幼児保育の発展と歩みを共にして来た。この間、幾多の先駆的保育理論、実践研究発表等が誌上を飾り、わが国の幼児教育の発展に測り知れない寄与を成して来た。現在まで継続する幼児教育専門誌として、わが国最古最長であるのみならず、雑誌出版史上、極めて稀有な例を示している。

本書は、昨年刊行の『復刻・幼児の教育』（第一期・明治三十四年～大正九年）に続き、大正十年～昭和十九年の二十四年分、二十四巻を、一挙に復刻刊行するものである。大正・昭和期はわが国幼児保育が日進月歩の高進を示し、時代背景もめまぐるしい変貌を遂げた時期にあたる。

わが国の幼児教育の進歩の様相を概観する好個の原資料として、また先達の抱負や熱意の結晶する稀有な文献として、現代保育を考える人々に資することを念願する。

### 〔体裁・内容〕

全二三巻、別冊著者別索引、A5判、クロス装、外函入、題字・東山魁夷

〈二二巻～四四巻〉大正十年～昭和十九年

『幼児教育』（第二三巻第八号まで）

『幼児の教育』（第二三巻第九号以降）



○原則として一年分を一巻に合本（第四三巻・第四四巻を一巻に合本）

○総頁数・約二万頁、各巻平均八三〇頁。

○各号表表紙から裏表紙まで、広告頁も含めて、完全復刻。

○色刷の表紙もできる限り原本に近い色で再現。

○復刻にあたっては原本を尊重し、原則として修正を加えない。

〈著者別索引〉

・本文二四頁程度。

・戦前版通巻（第一巻～第四四巻）の総執筆者を収録。

・〈個人名〉、〈ペンネーム〉、〈団体名〉別に収録。

〔刊行〕

名著刊行会

〔定価〕

現金価格 二二五、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕

総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 千代田区神田神保町三一二五 精和ビル

TEL (〇三) 二九五―三五六一

大阪本社 大阪市西区北堀江三一六一―二三

TEL (〇六) 五三一―九八〇一

「幼児の教育」復刻第二期が刊行されることとなった。大正末年から昭和初年にかけての幼稚園における新教育の活発な動きを、新たに手にとって見ることができるのは大きなよこびである。「驚く心」や「飛びついて来た子ども」「よろこびの人」など、毎月の巻頭を飾る倉橋惣三の短文、また、粘土製作、手技材料、観察、夏期講習会所感、質疑応答など、子どもの心の本質を見出そうとし、それにもとづいた保育の実際をつくり出そうとする、幼稚園がまだ少なかった時代の純粹で素朴な努力にふれると、保育のスピリットを湧き立たせられる思いがする。

この復刻第二期の時代から、すでに四十年を経ている。この四十年間は、幼児教育界にとっても激動の時代であった。昭和初年の新教育の直後には、第二次世界大戦と、それにつづく終戦後の混乱期があり、新教育運動によって提出された

幼児教育の本質への問いは、幼児教育を存続させる精一杯の努力のかけにかくれてしまったかのように見える。そして、日本の社会が復興しはじめや、直ちに高度成長の時代を迎え、幼稚園も、数の上で極度に急激に増加し、一般家庭への普及に伴って、社会への直接の要望に匹する以外のことに目を向ける余裕がなく、ひとたび、昭和初期に提出された幼児の教育の本質的課題は、それ以上実践と結びつけて発展することなく現代に至ってしまったのではないかと思う。

もちろん、昭和初期と現代とは、人々の抱えている世界観や人生観は異り、当時の新教育論がそのまま現代に通じることにはならないだろう。現代の方が、世界に対する展望はもっと明るくなく、人間に寄せる期待は楽観的でない。それだからなおさら、幼児期に人間らしい生活を与えようとする幼児教育の本質的課題―宿題―は重要である。(津守 真)

## 幼児の教育 第七十九巻 第九号

九月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年 八月二十五日 印刷  
昭和五十五年 九月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

118 東京都港区三田四ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

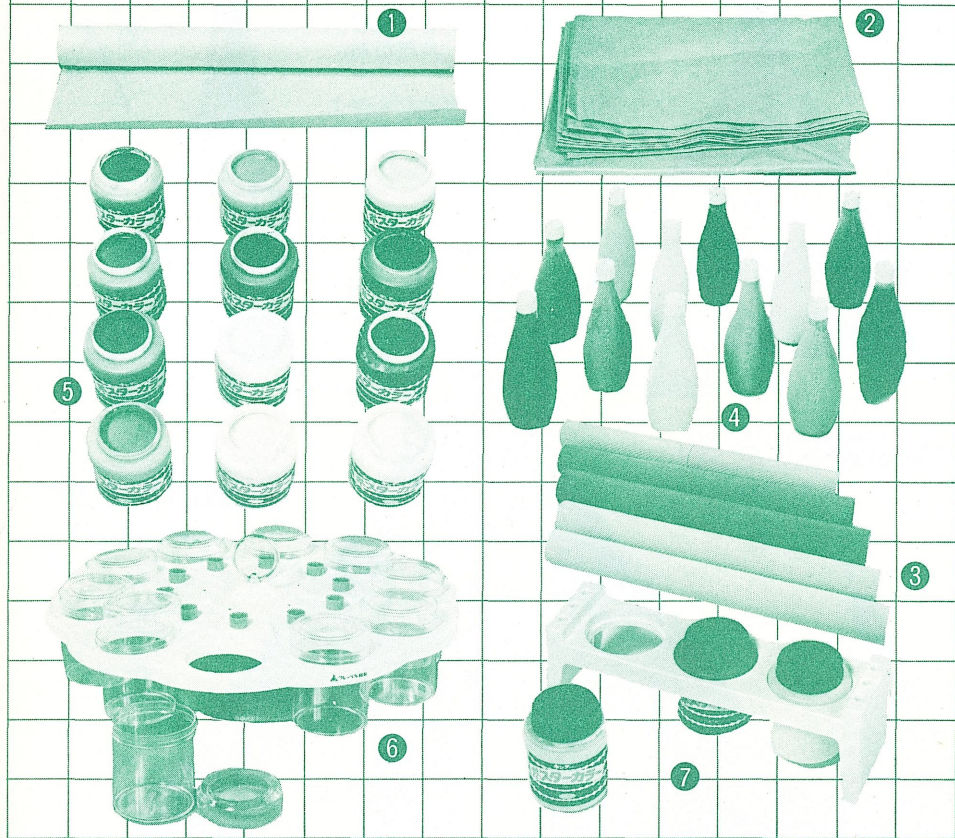
発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

フレーベル館の

# 絵画・素材用品



- ① 不織布(ロール巻)  
2本1セット 5,500円
- ② 造形シート  
180cm×260cm 4,600円
- ③ 色段ボール(ロール巻)  
4色10本1セット 3,300円
- ④ キンダーポスターカラー  
12色1セット 9,000円
- ⑤ キンダーポスターカラー 広口  
12色1セット 17,000円
- ⑥ カラースタンドA  
直径42cm 6,500円
- ⑦ カラースタンドB  
プラスチック製 1,800円
- カラーモール  
10色1,000本(各色100本)  
1セット 3,800円
- ニューボール  
5色250本(各色50本)  
1セット 4,500円
- 発泡ボール  
50個1セット大 1,600円  
100個1セット小 1,200円
- 竹ヒゴ  
2束(1束100本)  
1セット 1,700円
- 画面おりがみ  
10色1セット 3,600円
- クレープ紙  
8色1セット 1,900円
- 壁画セット  
10色1セット 1,600円
- 絵筆  
20号10本1組 4,200円  
18号10本1組 3,600円  
16号10本1組 3,100円  
10号10本1組 2,000円
- 刷毛 300円

くわしくは、フレーベル館代理店、支社、支店、営業所、特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

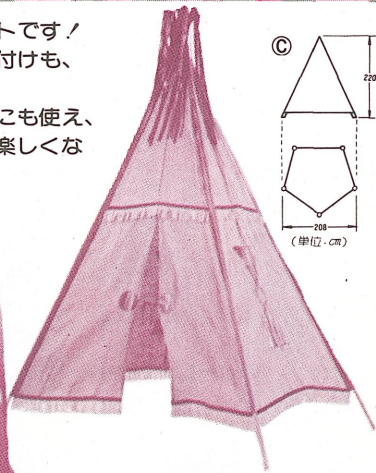
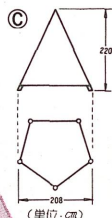
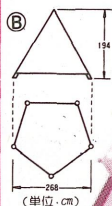
子どもたちの遊びの空間を広げます!



# インディアンテント

タムス社

- ★ 高品質の布製テントです!
- ★ 軽く、組立も、片付けも、簡単です!
- ★ 室内、室外いづれにも使え、ごっこ遊びがより楽しくなります。

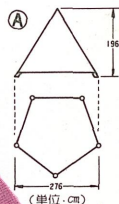


インディアンテントB

38,800円

インディアンテントC

28,600円



インディアンテントA

45,600円

くわしくは、フレーベル館代理店、支社、支店、営業所、特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館